

横浜歌人会 会報 第百号*

横浜歌人会会報第100号

特集◎インタビュー

岡部桂一郎 氏 … * 01

草柳繁一 氏 … * 25

横浜歌人会会報 100 号を迎えて … * 40

平成 22 年度 観月会報告 … * 43

新会員のご紹介／ご逝去 … * 44

●岡部桂一郎氏インタビュー

動かざる樹の沈黙

——戸塚の谷に根ざして

J R・戸塚駅東口からバスに乗って、下新橋のバス停で降りる。住宅の中へと伸びる坂がある。その坂は、コンクリート舗装にたくさんの円が彫られたところから、急に傾斜を増してゆく。丘を住宅地のために整備したというよりも、その起伏に沿って自然と家が建てられてきたようで、車と人がやつとすれ違えるほどの急勾配に、風がほのかな金木犀の香を運ぶ。

道なりに左へと曲がる一角に墓地があり、後ろからそっと包むように竹が撓いつつ、さらに奥へと続く。道を登り切った辺りには、ひとときわ光を浴びる花のある家が見えた。黄色い花の家、そう由紀子夫人から聞いていた。

ベルを鳴らして、ドアを開けば、そのまま入ってきてと声がする。まっすぐな廊下、正面の部屋を突き抜けて庭の緑の木々が眩しい。その緑に向かって置かれている椅子が、岡部桂一郎氏の場所という心地よい風が通り抜ける。一本の梅が、崖に張り出すように斜めに伸び、下へと屋根の重なりが見える。その間に色づき始めた柿の実が見え、対岸に鬱蒼とした森がある。軒に釣鐘型の風鈴が、穏やかなときをめぐる。

春風になびき仰向く竹群は青しなやけき幹の集まり
『一点鐘』
静かなる枝がのびきて白梅の吐息のような欠伸をしたり
『竹叢』

——岡部桂一郎さんと由紀子さんは、山下陸奥の主宰する「一路」に所属していた。また、葛原妙子が会長をしていた東京都大田区民短歌会に参加しており、角宮悦子もそれらに所属、参加していた。『岡部桂一郎全歌集』（青磁社、二〇〇七年）の年譜を見ながら思い出が溢れだす。

角宮 昭和32年ですものね。あの大田区。このとき岡部さん、四十二歳ですものね。

由紀子 ああ。

角宮 葛原さんが大田区の短歌会の会長ね。恐らく、鈴木春江さんが私を引っ張って、それで葛原さんのおうちへ行っただけです。

由紀子 そうですか。

角宮 そこで、林民雄さん。やわらかあな…。

由紀子 いい人よ、あの人。シャイな方で。私ね、穂曾谷秀雄さんが好きだった。作風も好きだったしね。

角宮 お人もよかったのねえ。

由紀子 ううん、懐かしいですよ。なんだ、お会いしているんじゃない。

角宮 お会いしますよ。あとは、遠くから眺めて憶えていただけで…。

由紀子 いいえ違うの、桂さんじゃなくて私と。私だって行つてたんだから、大田区短歌会には。

角宮 じゃきつと、お会いしますよ。

由紀子 日にちが、年代がずれているかな。

角宮 私は何回でもないですけどね。横浜に来ちゃったからね。

由紀子 ああ。だからか。

角宮 でもね。そのとき、鈴木春江さんから長いお手紙もいただいているし、もう少し、私……。だめなんですよね。面倒くさがり屋のところがあつて、あまり積極的な人は。

由紀子 うんうん。

角宮 でも惜しかった。そしたら、私も斎藤史さんとお付き合ってきた。もう一歩お近づきになれたはずなんですけれど……。まあ、要領が悪いから。このとき葛原妙子さんのおうちで、私が一番年下だからお茶を出さなくちゃいけないと、ちょこちょこやっていたら叱られた。岡部さんに叱られた、私。

由紀子 おおう、珍しい。珍しい。

角宮 ちゃんと話を聞きなさいって。

由紀子 ああ、お茶なんかどうでもいいと。

角宮 そう。

夕ばえの疊の上に土くれが形をなして器^{うつわ}ありぬ

『緑の墓』

由紀子 それは、わかりますね。

角宮 あとからそれを考えると、ものすごくいいことをおっしゃってるの。でも怖かったの、岡部さんが、私は。

由紀子 あとから直りましたでしょ（笑）。

角宮 直りました。

由紀子 そういう人じゃないから（笑）。

角宮 でもそのとき、ぱしっといわれた。そんなこといつてくれる人いないですもの。なにかやらなくちゃいけないと……。そんなことするんじゃない。こ

つち来て大切な話を聞きなさいって……

由紀子 うんうん。

角宮 おっしゃった。

由紀子 私ねえ、あなたにさあ、最初にお手紙出したときは、変な歌を出したでしょ。歌を。

角宮 面白い……

由紀子 それはねえ、桂さんがね、悦ちゃんなんていう人じゃないの、桂一郎、わかるでしょ。女の人を悦ちゃんなんて呼ぶ人じゃないの、桂さんは。女の人に嫌われるし、女の人傍に来てくれないし。自分も（山崎）方代みたいにな、すつとね、ここ（胸）に手入れる人じゃないから（笑）。桂さん……悦ちゃん、悦ちゃんっていうからね、どんな人、どういう間柄なんだろうと思っていたの、私（笑）。ほんとうに。

角宮 ちゃんとね、葉書に歌をつくってね（笑）。私、それも知らなかったの。そしたらね、井澤幸恵さんが、岡部先生、悦ちゃん悦ちゃんっていつてますよっていうから。私、直接岡部さんから悦ちゃんと呼ばれたことないから、どうしてなのかなって。

由紀子 誰が悦ちゃんっていうの、草柳（繁一）さんがいうの？

角宮 草柳さんも私を悦ちゃんというの。

由紀子 ああ、だからだ。誰か必ずね、あの……

角宮 草柳さん、きつと誉めていつているのよ。

由紀子 悦ちゃんという人がいて、それを自分も嬉しくて嬉しくてしょうがないわけよ、そういう言葉をいうのが。女の人についてたことがない言葉だから。それでね、あ、そうか。

角宮 わあ、嬉しいわね。

由紀子 ね（笑）。

角宮 悦ちゃんなんていわれていたのね（笑）。

由紀子 だけど、ほんとに不思議だったの。ほんと

に不思議だったの。だから悪いけど、どういう……

角宮 どういう、女性かと。

由紀子 そうそう。間柄なんだって。

角宮 どういう間柄……（笑）。

由紀子 悦ちゃんなんていう人じゃないですもの、桂一郎は。そういうこという人じゃないの。

角宮 誰もいわないですよ、悦ちゃんなんて。

由紀子 だから、草柳さんだ。草柳さんね。だからだ。嬉しかったんだ。自分もいいかったんだよ、それ（笑）。わかりました。

角宮 それは、全然知らないところで……

由紀子 わかりました。

角宮 へえと思つて。なんだか、わかんないけれど。

由紀子 嬉しい。私は嬉しいです。そういうふうにな、堅い人間がね、そういうこといつてくれるっていうのが、嬉しいです。

角宮 堅いのね。

由紀子 堅いですね。結局。

角宮 でも、優しかったことある。『緑の墓』。私、もう、ほしくてね。あれは、「一路」の高橋咥吉さんから借りたんですよ。

由紀子 ああ……懐かしい名前ね。あの方も、死んじゃったものね。とうに早くにね。

角宮 随分前に、その『緑の墓』。もう、扇風機も

うちなかったのね。買うお金もないのね。

由紀子 そういうときもあつたんだ。お互い。私たちなんかもボロ屋に住んでましたからね。

角宮 我が家には、扇風機がなかった。でもまあ吹

きつさらしで、風は吹き抜けては行くけれど……

由紀子 でも失礼ですけど、お年わからないけれど、昭和何年くらい。

角宮 11年。

由紀子　そうでしょ、随分違う。ずっと若い、あなたは。

角宮　若いことは、若いですよ。それで、汗を流しながら…

由紀子　戦後は、結局辛かったですよ。

角宮　辛い。

由紀子　それよりずっともう、ものがそろそろ豊富な頃、結婚されているはずね。

角宮　まあまあ。でも冷蔵庫も洗濯機もなにもないですよ。

由紀子　洗濯機だって、これですよ。こうやって、こうやって、中がじゅると出てくる。絞ってね。出てくるの。あなたなんか、わからないでしょ。

角宮　わからない。私の電気製品は、電気釜だけ。大田区の久が原にいたときは、六畳一間の流しがあって、トイレは共同。

小さな電気コンロの赤き火に春の夜ふけてはかなくぞ居る
『緑の墓』

由紀子　その頃どこに、もうどっかの結社に入ってたんだでしょ。

角宮　「一路」に入っていましたよ。

由紀子　誰が。

角宮　私が。岡部先生が、「一路」を退会なさるでしょ。

由紀子　驚いたわね。その頃、「一路」に入ってたの。

角宮　岡部先生が出たあと、私は24年くらいに入ってたんですよ。

由紀子　ああ…。

角宮　「一路」に。岡部さんと奥様が結婚なさった

頃に。

由紀子　ああ…だからもう私そのね、あなたの名前わからないし。入ったって下のちよぼちよぼに入ってるんだから、当然私は上の方しか知らないから、「一路」でもね。だからあなたのことを…。私たちが出てからあなたがお入りになった。当然ね、当然わかんない、お会いしてない。

角宮　入ってしばらくしてから、高橋嘯吉さんから、岡部さんのことを聞いたんですよ。そして、この歌集は、あの方がおっしゃったのは、焼き火箸を掴むようなもんだよ。火傷するよって、いったの、『緑の墓』。そうして、私に貸してくださいました。

由紀子　でも、『緑の墓』は、昭和31年ぐらいですよ。純が生まれたあとだから。へえ、随分、退会して、あなたがお入りになってから何年かありますものね。そうやってみなさん、桂一郎のことは、思ってくださいました。

角宮　ものすごい才能の、すごい人だっていうことは、高橋嘯吉さんから聞いたんですよ。で、いろんなこと私に語ってくださいしたのは、自分の息子さんに私をお嫁さんに欲しかったわけ。

由紀子　おお…。

角宮　あの頃よく銀座の、不二家でショートケーキを食べながら、いろいろお話をしてくれて、岡部さんのことは…。

由紀子　ありがたいね。

角宮　すごい人ですよ。なにがあつたのかは知らなかった。経緯はね、退会した…。そして、『緑の墓』を私はみんな書き写したの、ノートに。

由紀子　あらまあ。

角宮　わからないけど、なにか魔力があるの。火傷するよっていわれた意味はわかった。だから…。

由紀子　あの方も包容力ある方ね。大きい方ね。なんで、早く亡くなったのかしら。あなたは、「一路」にどういう機縁でお入りになったの。

角宮　角川の「短歌」で女流特集みたいなことを…、

宮英子さんなんかもいましたね。で、なんにも知らないでその女流特集を読んでいたら、山下喜美子さんが、小さなエッセイで猫が好きだということ、猫を十何匹飼っているっていう。ただ猫が好きだっていう、私も猫が好きだから。それでお葉書を出したら、すぐにお入りなさいって…。猫です(笑)。

由紀子　それは面白いね。

角宮　それだけで入ったの。

由紀子　それは面白いね。一路草房、何十回行ったかわからないけれども…。

角宮　一路草房ね。等々力の。

由紀子　猫そんなにいたかね。いたことは知ってますけど…。

角宮　いた。それでね、蚤がいた。

由紀子　あらっ、そうおう…。

角宮　だって、猫ですもの。

由紀子　おお。

角宮　私、蚤つぶしたの。

由紀子　なにしろ、我々がなくなつてからだから、もっとあとだから猫も増えたのね。そんなにいなかったな。なにしろ、人間の食べ物がない頃ですから、私の頃はね。

角宮　徐々に私の結婚する頃は、食べ物もよくなつたし、私の結婚式にも山下陸奥夫妻は、出席してくださった。

由紀子　ああ、ほんと。ああ、そういうこと。それは知らなかったわ、そうなの。

角宮　でもね、背いちゃった…。

由紀子 早くにお会いしなければね。こちらが出るの遅かったら、あるいは早く入ればもつともつとお会いするそのね、結びつきかなにかあったでしょうけれどね。そのあとからだ。そのあとからのね。

角宮 でもね、ううん…。

由紀子 あなたが、向こうへ行ってから、草柳さんとの交流があったりして、そして、そこで草柳さんがいう、あなたも…。

角宮 横浜歌人会。横浜歌人会で…。

由紀子 それからね。悦ちゃんが始まったんだ。ああ…、「一路」ではないんですよ。

角宮 「一路」ではない。

由紀子 わかりました。

角宮 あの…、ちよつと、「一路」離れたこと忸怩たるものがあるの、私の…。

由紀子 それからお辞めになったの。

角宮 うん。あすこの、あの…。

由紀子 亡くなってから、先生が。

角宮 いや、その前に…。

由紀子 あら。

角宮 離れた。

由紀子 いらつしやるときに。だって、結婚を…。

角宮 だって、あそこの歌会がだめだったの、私。

由紀子 おお…。



岡部由紀子さん

角宮 なんか、上流階級の奥様がいつぱいいるような感じが、私はしたわけ。

由紀子 あははは。なるほど。

角宮 生方たつゑさんの字を帯に染めている人とか、ちよつと私には合わなかったのね。

由紀子 なにしる、川田順のね、あの、まあそういう…、いわゆる上流階級ですよ、やつぱり。相沢さんにしるね。名和長昌君なんか、私は名和君だったけど、あれ男爵かなあ、やつぱしそういう…、大名ですよ、名和長年とか。

角宮 名前あるわよね、そういえば。

由紀子 末裔ですよ。

角宮 やつぱり、感じ当たっていたんだ。ああ、長くいるところじゃないと。求めているものと違ったの。でも、山下陸奥はとつてもかわいがってくれた。

由紀子 でしょうね。結婚式まで出てくれて。

角宮 辞めるなつていう、手紙までもらったけど…。

由紀子 それはそれは、珍しいこと。

角宮 私はまあ…。

由紀子 なな、なぜ、私たちがあの23年、といつても末ですよ。だって、夏には大会があったんだもの。大会にはもう、山形義雄なんか陸奥先生のことを「常若の君」つて賛辞まで…、あの歌まで捧げているんだから。で、もちろん、そういう大会に集約して「一路」の十五周年、二十周年…。

角宮 明治記念館でやった…。

由紀子 いいえ、違うの。普通の、大森のものすごい豪邸でした。建築会社の社長の、ものすごい豪邸。

角宮 その方が、会員だったの？

由紀子 いや、そこはわかんないです。どういう上流階級の方が、そこを借りたか。なにしろものすごい人数が入りましたからね。豪邸でないと。ホテル

じゃなかったですね。普通の私邸ですよ。私邸でもすごかったですよ。二階、上下をぶつつぶしたかたちでもう…、皆さん参加して。

角宮 それなりに華やかだったのね。

由紀子 私はやはり、ま、いわゆる、性格もあるけれどね、飾ることは嫌いなんです。だから、あなたが、「一路」を出られたこと、そういう意味で納得するの。それを感じ取られたこと、気風をね。私、前川（佐美雄）さんの横に行ってお話するときも、周りを、女の人が帽子なんかをこうフランス帰りのような、女の人が取り巻くのね。

角宮 あすこも、すごい…。

由紀子 すごいところなのね。だから「一路」のこととあなたが感じるっていうことはそういうことだと思ふの。で、我々が出てしまった。陸奥先生は、桂一郎を連れてゆくときにも、ご夫妻がネクタイがあだのこうだのついているんなことをいう、それが青年の潔癖というのかね、嫌だったんでしようね。どんなに世話になったかしれやしないですよ。喜美子夫人からだって、あのものがないときにも疎開先にも。岡山の黒崎村つていうところに疎開してたんですからね、おばあちゃんがね。そこに白糸だとか、塩だとか。その頃、物資がなかったものね。

山鳩のなきてやみたる夏の日の黒崎村の小部落あり
『戸塚閑吟集』

角宮 貴重ですものね。

由紀子 そういうもの、なんだかんだって送ってくるの。そういう感じ。すごい密な、桂一郎のお母さんにまで…。

角宮 あの、細やかだったんですよ、山下喜美子さ

んは。今でもいただいた指輪とか、いわゆる宝石ではないけれど、ブルーのトルコ石まがいがありますよ。オルゴールだとか残っていますよ。お人形とか。一路草房を訪ねると、ほんとうにすてきだった。芝のお庭に出られて咲いている薔薇を二輪ぐらい切って、そしてまたせてくださる。そういうのが、ものすごく、だつてまだ、少女ですから。

由紀子 まあ、同じこと。私は、喜美子夫人が、編集のお手伝いをして帰ろうとすると、私の靴の中に蕁ね、庭からとってきた蕁がね、入っているんです。それでこそ、ほろりですよ。

角宮 ほろりですよ。

由紀子 そういう方、わかる。

角宮 わかるんですよ。もう、そして、あの方は『薔薇の位置』っていう歌集を出されたでしょ。第一歌集、確か…。

由紀子 そうそう。うん。

角宮 それで喜美子先生からいただいた薔薇をもって、その頃、茨城の奥の方ですからね、住んでいたの。あの歌会に、歌会に来るのが、どんな思いで来たかね。あの常磐線、常総線っていう、あのちいっちゃなガタガタ列車に乗って、取手から上野に常磐線に乗って、そしてこう等々力へ来る。あの長い道中がもうほんとうに…。

由紀子 ほとんど同じ気持ちね。どんなに草房にゆくのが楽しかったか。自分の青春のね、すべてを、すべてをそこに。そこで岡部桂一郎というってことが、こうなつて来たからね、なおさらですよ。

角宮 ああ。

天を指す樹々垂直に垂直にして遠く小さき日は純粹なり
『緑の墓』

由紀子 でもその頃も、付き合いがあつた方代とか、岡部桂一郎っていう人で。私はね、会う前からもう「一路」の誌上でね。岡部桂一郎と…、直原研一って知らない？

角宮 知らない。

由紀子 ああ、そう。直原研一って、あの山下先生夫妻がすごくかわいがつた人。鎌倉の聖テレジア病院で、結局、結核で亡くなつちやいましたけれどね。岡部桂一郎、直原研一、芝山永治。まあうまくないけど、アイドルとして竹花忍とかね。そういう人たち、すごくまい人たちがたくさんいたんですよ。

角宮 そうそうとした人たちが、いたんですよ。

由紀子 山崎方代、岡部桂一郎、直原研一なんて私の憧れで、会う前からもう作品好きだったの。人間そういうところあるじゃない、作品に惹かれてゆくというね。その作品で惹かれていて…。ちよつと遅かったね。惜しかったね。ちよつとずれたのね。もしいたらばね、わかると思う。あなたも割になにか直接おつしやるような方だし。

角宮 ええ。

由紀子 あの、この間亡くなった河野裕子さんね。よく私のこと、岡部さんの由紀子さんって真つ正直ね。真つ正直な人、好きなのつってね。私もね、あなたも真つ正直なのよ。だから、かちんとぶつかったのねって、お話するんですけれどね。

——由紀子さんは、いつも十二時半過ぎに昼食をとって、一時半過ぎくらいに家を出て、お天気の良い日は歩き、岡部さんの「けいあいの郷 緑園」に二時頃に着くという生活を毎日送っている。

手作りのお新香がテーブルに置かれる。レンコンの白、茄子紺に、大根、胡瓜の糠漬け。昼食をし

ながら話は続く。

由紀子 酒飲みだからね。桂一郎が、ああやつて腰が痛い痛いになつてしまつたんだって、横須賀のホームから線路へ落つこつたのよ。酔っぱらつて。二、三十年昔、出版祝い…。

角宮 横須賀の線路…。

由紀子 横須賀に会があつて行つたんですよ。その頃、大正製薬を辞めてから、いろいろそういうところへ行つていたのね。お教室をもつていたの。横浜のそこうとか高島屋とかね。

角宮 ええ。

由紀子 そこでね。

角宮 線路に転げ落ちたの？

由紀子 うん。生徒さんの歌集の出版祝い、ただ酒を…。結局、私たちは二人とも…、うちは飲み屋のたまり場。電車がなくなるっていつても、あ、そんなこと心配しなくていい(笑)。わかんないわけね。で、方代さんは横になつて、ぱつと出しちやつておしっこ。布団から出して。大学教授なんて泊まつて、起きたかなつて思つたら、襖あけて襖のなかにね、しちゃう。哲学をしゃべるショーペンハウエル(笑)。なにしろ、酒のたまり場。私も飲むし。ご飯食べなくても、飲むほうだったから…。

角宮 奥様も飲めるから。

由紀子 そう。だから、もう楽しい。ひとつつもいやじゃない。来たらもうすぐ、お茶出さないの、うちは。一度も出したことないの。あとは出しても、水飲んでというんだけれども。全部お酒。だからもう、横須賀でホームへ落つこつて…。運転手がホームへ降りて、引きずり出した。血だらけです。私帰つてくるの遅いなあと思つたら、電話でもつて、も

もしこちら横須賀の救急隊員です。ええってなもので、桐子に電話してすぐ車で行ったの。血だらけになって…。でも、顔は平気なのね。私もさんざんやって年中怪我して、崖から落ちて血だらけになったとしてもね、うちは血だらけは平気なの。でもこちを打ったのね。レールか枕木かわかんない。それであんなふうになっちゃったの。ここがね、圧迫骨折でね、飛び出してますって。体が曲がっちゃってね、ほんとかわいそうね。でもね、これ、お酒のせいじゃないよって。お酒に文句いいたら、お酒に申し訳ない。われわれはお酒でどのくらい、楽しい青春を送ったかしれないからね。お酒には文句いわない。お酒のせいじゃないの。

角宮 よき理解者ね。

由紀子 いやあ、ほんと。いまもうドクターストップが…、もう十何年も前から経っているの。もういいの、お酒飲んで死んでも。彼もたくさん飲まないでしょ。一合ぐらいずつと飲んでいたしね。ううん、それをね。京都の寺田由紀夫さん、知らないでしょ。

角宮 知ってますよ。

由紀子 ドクターストップがかかっても飲ませる由紀子さんはすごいって、いつてくれた。

一合のコップに酒の盛りこぼれ受け皿浸すときの豊かさ 『一点鐘』
「黒龍」の五勺の酒を呑みしかばほのぼのとして街をゆくかな 『竹叢』

由紀子 あの人は、有名な医者ですよええ。京都の日赤の。

角宮 有名な方だったんですか。

由紀子 夏にね、ここで胡瓜切っていたらね、ラジ

オからね、寺田由紀夫の声が聞こえてくるの。ええつ。あの人の声独特なのよね。寺田由紀夫がどうしたのって。私なんか寺田由紀夫さんてなもんでしょ。日赤の教授つたらすごいんですよ。

角宮 お医者さんは知っていたけど。日赤の教授とは知らないわ、私。斎藤史さんの面倒も見てらした。

由紀子 そうそうそう。

角宮 読売文学賞のときに、私、お会いしましたよ。スマートな方ね。

由紀子 あのときも、足が悪いのに京都から来てくれて。私、大好き。悪いけど、私抱き合っちゃったと思う。みなさん見てたかもしれないけどもね。大好き、ああいうタイプはね。一緒に何回も北海道とか、信州とか。私なんか一切手続きしない、できないのよ、桂さんも私も。航空会社の手続きを鈴木春江がね、あらゆるものをするわけ。桂さんは飛行機が怖い。ほら、青函連絡船が最後だったっていうで、最初で最後の乗ったりしてね。一晚揺られていて。で、信州のね、史さんのお宅へなんか、自動車に方代なんかと何回も行っているのよね。全部そういうこと、鈴木春江がするの。いい人よ。最後は葛原妙子の「をがたま」。それともう一つ…。

角宮 「砂金」。なんだか、みんなきれいに忘れたの、すすすって思い出す。

由紀子 夜中でも葛原妙子から電話来て、折角やり合わせたことを、印刷所へもっていつてね、訂正するとかね。すごい、わがままをいうからね。あの…。

角宮 あの葛原さん。

由紀子 葛原さん、すごいんですよ。わがままです。葛原妙子のほうが史さんよりも、もしかしたら、うまいかもしれないと私は思っているの。だけどね、全然問題じゃない。人間的にはね。あの葛原妙子の

別荘まで行ったり、泊まったりしてますよ、私なんかね。

角宮 人間的には、斎藤史さんが…。

由紀子 そらあ、すごいそうですよ。私の母までに。母は九十七歳で亡くなりましたけれどね。具合悪いことを聞いたときに、お守りを送ってくれたりね。だって私の母のことまで心配して、お守りくれるなんてこと、普通ないでしょ。

角宮 うんうん。

由紀子 葛原さんは、魅力的な方なんですよけどね。

角宮 魅力的ねえ。

由紀子 魅力的ですよ。

角宮 髪をこんなふう…。

由紀子 私は嫌いでしたけど。馬糞みたいで(笑)。

角宮 ちよつと、日本人離れしてて。

由紀子 うん、そうね。

角宮 日本橋の三越の特別食堂に…。

由紀子 あ、そうそう。

角宮 野村米子さんと一緒に行ったら、その特別食堂で…。あの方座つていても違ふのよね。

由紀子 ああ、でしようね。あの方、オーラがね。

角宮 豪華なものが漂つていて…。

由紀子 そうね。別荘泊まったときもすごかった。

角宮 スーパーの人じゃないからね(笑)。そういうことがあった。

由紀子 歌はすごいですよ。そういうことあるわね。史さんなんか、自分の家の裏庭から今朝とってきたよって、胡桃を二つ三つ、こう私の手に乗せると、こうやって「史の手が包んでこすって温めるように」、すべてがそういう感じ。ね、わかるでしょ。優しいね。苦労したの。ほんとうに苦労したの、史さんはね。

角宮 葛原さんは、苦勞してませんよ。

由紀子 したかもしれない。

角宮 したあ？

由紀子 したかもしれないけれど、あの方は、こうやってこう捨てて。史さんの場合はこう受け入れて、苦しくても苦しくてもこうやって、いつでも受け入れて。あの人ははね除ける。それが苦しいよといえ、苦しいことあったかもしれない。信仰のことにしろ、娘さんたちとのね、いざこざとかね…。

——ちりん、ちりん…、緑の風に音がこぼれる。

角宮 風が、気持ちいい。

ひとりいるわが腋の下くすぐるがごとき感じに昼の風過ぐ
「短歌」(平成22年4月号)

由紀子 ここね、谷^{やつ}つていうの。向こうにほら、山あるでしょ。新橋宮古公園といって、よく桂さんで行ったの。そしてこつちが高台でしょ。この下に道があつて、坂だらけ。この辺を谷つていいですよ。

日の落ちて宮古の森の灯りたり隣りの爺^{ぢやばば}婆どこへ行ったか
『竹叢』

動かざる樹に沈黙のときありて小さき体は蟬の鳴くなり
「短歌」(平成22年4月号)

——小学五、六年の夏休みに過ごした高野山龍泉院での経験は、岡部さんに大きな影響を与える。のちに高野山大学へ進学を思うが、断念することになる。

由紀子 彼は、結局クリスチャン学校だったでしょ。

だけど、あのステンドグラスから洩れてくる、ああゆう最たるね、エキゾチックなね、賛美歌が流れてくるというなかで信仰するタイプじゃないわね。やっぱりね。やつぱり、薄暗いね。じとじととした日本の風土、高野山みたいなね…。だから、小さなときから、なにかやつぱり、そういう仏教的なものに惹かれてた。そういうふうが自分の生き方に、肌に合う。そういう性格的に暗いですもの。ほんとうに暗い男。ほんとうに蛇の血、人間のあつたかい血じゃない、蛇の血かなと思うくらい冷たいところもあるし。冷たいっていうのは、家族に対してよ。なにしろ玄関で、いつてらつしやい、おかえりなさい、何十年中やつているでしょ。ただの一度も、行つてきます、ただいま。ただの一度もゆつたことがないですよ。駆けたことがない。これは珍しいと思う。

角宮 声をかける…。

由紀子 いや。目の前シグナルがね、青がもう少しで切れるから私は駆けるほう。渡つちやうほう。私はなんたつて、赤でも駆けちやうほうだから。瞬間的に駆けちやうほう。桂さん、のろい。絶対にしない(笑)。

ふさふさと毛におおわれし犬一つやや考えて信号わたる
『一点鐘』

由紀子 軍事教練で若いとき、二十代でちよつと入つたらしい。上官よりも遅くて殴られたつていうから徹底してるよね(笑)。上官より遅いつて。

角宮 殴られるわよね。あの頃はね。

由紀子 なにしろね。動作がのろい。

角宮 まあ、ただもんじやないんだ。でも、作品すごいですよ。ステンドグラスから洩れてくる光のようなどこじやなくて、薄暗いところがつておつしやいましたけれど、モダンな歌あるわね。ものすごいモダンですよ。

由紀子 彼はやつぱり、私など食べたことがないような物を幼少の…。彼は尋常小学校の頃なんて、普通の靴じやなくて編み上げの靴だったとか。神戸の三宮つてあるでしょ。銀座のね、服部時計店と同じようなね…。

——四歳のときに父親は亡くなり、母親の実家が神戸市三宮で襖や家具商を営んでおり、祖母の後押しを得て育つ。

角宮 そのせいね。モダンなものを感じる。

由紀子 小さなときから、紅茶飲んでる…。

角宮 小さいときから、紅茶飲んでたの(笑)。

由紀子 ドイツ菓子の、今ぱつと出ない…

角宮 ええとね、バームクーヘン。

由紀子 ち、ちがう。店の名前。大きな老舗の名前…。あの、そういうところからのパンだとかね。私なんかとそれこそ、もう、全然。ちよつと違うね。

ドア押せば小さき鈴の音がするドイツ菓子店前の日だまり
『一点鐘』

わが年を聞くに「八つ」とはにかめば西洋婦人笑みて頭を撫ず
『一点鐘』

角宮 お坊ちゃんだ。

由紀子 そういうこと、いわないんですよ、彼は…。

角宮 子供のときからお紅茶飲んでいたつていった

ら、やっぱしそうとうモダンですよ。でも無口になったのは、なにかあったのかも知れないね。無口になっちゃったつてことは…、なにか。

由紀子 なっちゃしまうんじゃないくて、本質的ですよ。

角宮 そうですか。うん…。

由紀子 まわりが、おば、女の家系…。

角宮 ああ…。

由紀子 まわりがみんなね。で、商売でしょ。青木繁なんていう人も出入りしてて、その人のもらっておけばね(笑)。何百万になるのね。おばあさんたち、襖、建具だとか、なにかそういう商売していたみたいね。で、お父さんが、岡部米穀…、米屋、いつも米屋じゃないんだぞ。岡部米穀商だつて(笑)。大きな新しい、精米みたいなの買ったり…。あるんじゃないの土間に、開けると…。

角宮 ああ…、精米機ね。

由紀子 その頃ないようなね、新しい…。

角宮 うんうん。

由紀子 三十三歳で亡くなっちゃったんですって。

角宮 お父様が、早いね。

町なかに米を商う米穀商岡部米店土間しずかなり
『竹叢』

少年の遊びつかれて眠りたる角店にある大き米び
つ 『竹叢』

ほほえみは笑いとならずわが父はどこへいくのか
声のなき顔 『竹叢』

角宮 奥様は、最初、作品が好きになったんですよ。
由紀子 そうそう。方代と、最初に方代と会って、びっくりしちゃった。もうね。日記なんかでね、詩人の山崎方代を思うなんて書いていたりして。初め

て22年頃かな。復員服…、あんななんか、わかんないかもね。

角宮 復員服、知ってますよ。

由紀子 すごい服着て、びっくりしちゃった。ぎよつとしたね。最初に会ったときは

角宮 怖かった。

由紀子 うん、それはすごいですよ、あなた。髪はボサボサ。顔は洗わないだろうし。

角宮 汚いつてことね。

由紀子 汚いし、異様ですよ。会ったときはよ。そのあとは平気。私は平気になりましたけどね。

角宮 方代さん、かわいいところがあるつていうわね。

由紀子 うんうんうん。方代さんの話したら、方代さんの話だけで半日暮れちゃいますよ。

角宮 女の子にもてたいのよね。

由紀子 最後はほら、鎌倉の人になっちゃったからね。それから「泥」の人たちも、片山さんにしても、草柳さんにしろ、もちろん、桂一郎もだし、もうほんとうの付き合いじゃないね。結局方代さん、これが好きだから、ね。これがね、本質的にね。ちよつとでも作品けなしたらだめ。誉めれば誉めるほど良くなるの、方代さんはね。鎌倉でそれこそ、すつと通れば、方代さん寄ってきなよつてことで…。もう人生でも…、良かったと思うよ。最終的に肺癌になつてね、辛い一時期があったにしろ、よかったね。

角宮 鎌倉の人になつたんだ。

由紀子 うん、鎌倉の人になった。われわれの人ではなくなつた。

角宮 わかるわかる。うんうん。

由紀子 むかしのね、東京の六郷にいたときなんかもう、汚い袋にバサツとくれたの。雑草のなかにタ

ラの芽だとかね、蒔だとか、芹だとか。あとで掃除すると、雑草のほうが多いのよ(笑)。大変なのよ。でもそういうね、ときで結ばれた、私なんかの方代でなくなつたということ。

水仙の白き花びら散りてより皺よりそむるまでの
悲しみ 『緑の墓』

由紀子 初めは、桂さんの肌着上げていたの。最後は、方代がいなくなつたのを、白い、あんなさあ、白い、ねえ、好きなのよ。方代白いのが…。

角宮 麻の背広。

由紀子 白いのなんかをね、桂さんにいらなくなつたのをくれるとか。反対になっちゃつた、最後はね(笑)。私が原稿用紙書けば一枚で、一万円くれたの。

角宮 えつ。

由紀子 ちよつと書いてくれつていえば、書くでしょ。原稿用紙書いてあげると、一万円ばつとくれるの、いつもうちで。

角宮 えつ、お金もつていたの。

由紀子 初めはないのよ。着るもんもなかつたですよ。

角宮 うん。

由紀子 結局、傷痍軍人がみなさん亡くなつてゆくでしょ。梓がね、どんどん増えてくるらしいのよ。ねつ、初めは。一番なんでも安く食べられるの、やつぱりね、粉だつて。メリケン粉だつて。メリケン粉溶いて食べたり、おからだつて。そしてうどんも安いつて。そういうもんで食べていたわけよ。ねつ、最初は。最後は家へ来るときになつたら、ゴミのようなものくれた人が、大船の鰻寿司。あれをいつもね、三つも四つもばあつと買つてくるの。そうふう

になったの。お風呂ゆくのタクシ―。

角宮 お風呂ゆくの、タクシ―？

由紀子 どこまでほんとうかなと思うんだけど。お風呂ゆくのね、金があまっちゃってしようがないから風呂へゆくのにもタクシ―でゆくんだったて(笑)。

角宮 傷痍軍人の入ったから。

由紀子 結局そうでしょう。最終的に万つていうお金が入るって、月にね。初めうどん食べていた人が、お金あまっちゃって、使いようがないんだって。

角宮 方代さんが鎌倉の駅前で、展覧会やられたんですよ。そのタイトルが…。金もいらぬ。名誉もいらぬ。ただ、酒…なんとかってね。なんだかそれ、うそっぽいと思ったのね。

由紀子 うそそうそ(笑)。

角宮 方代さんのところへ行こうって誘われたとき、私断ったからそれ以来方代さんとも縁がなかった。あんまり女の人に囲まれて、ニタニタしているところ見ちゃったでしょ(笑)。なんだろうって思ったの。でも、かわいいところあるよって、草柳さんがおっしゃった。あの方有名になったかったのよね。

由紀子 そうね。

角宮 それが表によく出てるのが、私、目に見えた。

由紀子 そこがかわいいってことでしょ、草柳さんにいわせればね。普通は恥ずかしくて隠すところね。いえないようなところを平気で出してくるしね。

角宮 うん。ああ…草柳さん、大人だね。それ、かわいいとおっしゃるのね。

由紀子 うん。でも最終的に、その敷居のところね、額をつけてね。岡部さん、申し訳ありませんでしたあっていつて謝ったの。意味わかんなかった。丸一年間くらい、うち来なかった。それこそ

入り浸り、六郷の家にだつて…。方代さんなんか、何百回、お正月から家にいるんだから。どのくらい大変だったかしれないよ。

角宮 お正月から…。

由紀子 駅伝というのがあつてでしょ。いつもラジオからするの聞いてて、それつつて、起き出して(笑)。うちが六郷橋の近くなんですよ、東京と川崎の接点の、それって。

角宮 いい場所。駅伝見るには。

由紀子 海津歌さんだつて、方代さんだつて、みんな行つて帰ってきたら、それまでに布団あげて、ご飯つくつて、大変でしたよ。若いからできたのね。

うつくしき心をもてる人々にま白き飯は喉ぐだり
ゆく
『緑の墓』

角宮 海津さんも、死んじやったわね。かわいそうだった、最後はね…。横田専一さんが亡くなつてからはね。

由紀子 横田さんは、いい方だったよ。何回も会つてないけど。包容力があるね。あのね、そこにどうぞといういい方でも、人間、人柄っていうのが出てくるのよ。初めてだとするでしょ、会へゆくでしょ。ちよつと、うろろしてるでしょ。そんなときにこちらへいらつしやいていう、ひと言でも違つてくるの。人間っていうのは、そういうものね。初対面の、そこはとっても大切ね。やつぱりね。そういうものがあつたつていう人、横田専一さんにはね。

角宮 人望があつた。

由紀子 それは、桂一郎にあつたとしても、桂一郎はそれがいいない人。方代さんなんか心がなくなつて、や、ややややつていう人。

角宮 うんうんうんうん。

由紀子 いろんな人よ。

角宮 いろんな人いるわね。方代さんのこと、鎌倉の人になつたからねつていう、そのひと言でわかる。

由紀子 わかるでしょ。もうね、すべてむかしの方代さんじゃないの。私なんか方代じゃないの。でも、いいじゃ…。竹花忍、方代つていうのは、むかしからの悪たれ、悪童ね。

角宮 悪童ね。大人になつても。

由紀子 そうね。桂一郎つていうのは、自分からその人にのめり込むということはないね。みんな来てくださる。

角宮 そうね。人が来なくなる、会いたくなる。

由紀子 やつぱり歌ですよね。私はだから、彼のことを好きになつたけれど、もしかしたら妻子があるかもしれないでしょ。それでもやつぱり歌が好きだから、接近してつたつて感じてでしょ。それに対して、もちろんなにもいわない。結婚するまで、なんにもいわないわね。こつちも聞かなかつたし…。お袋がいるつてことはね、聞いていましたけど。なんにもしゃべんないの。

角宮 作品でやつぱし、ものすごいものを感じ、好きになつたのね、作品が。

由紀子 私なんかほとんど歌がなければ、彼と一緒にすることもなかったし、私の人生つてやつぱり短歌。どういう意味かしの短歌。短歌という、それこそ趣味のようなものに漬り込まれちやつたような、事実だと思つてますよ。

角宮 そうですね…。

由紀子 いいか悪いかわからないけれど、短歌つてすごいと思う。はつきりいつて。その力なければ、ここまで生きて、彼と一緒にすることもなかったし、

生きてきたってこともないと思う。やつぱりすごい。なんだかわからないけれど、すごいんだなと思えますよ。

角宮 わかんないけど、すごいですね。

由紀子 すごくすごい。私のまわりは…、私もつくらない、彼もつくらない。いっさい人もそういうかたちであんまりたくさん来ないけれど。毎月毎月、全国からいろんなもの送ってくるでしょ。だから、結局歌だらけなんですよ。歌のそういうつながり、目に見えないつながり。前登志夫さんなんかとお会いしたことないけれど、もう、深い文通はしているし。そういう形でね。つながりがあるから…。

角宮 うん。四六時中会ってるからじゃないんですよ。やつぱし、引き合うものがありますよね。

由紀子 それが短歌だったってことね。いま桂一郎だって、すべて日付もわからない、孫もわからない、娘もわからない。それでいて結局話すことは、歌のことだけですからね。

角宮 ああ…。

由紀子 ほんとうにすごいね。この4月（平成22年）に、角川の「短歌」と「短歌研究」の最後出しましたよね。二十首と十首ぐらいかな。角川のほうは、三年も四年もため込んでいたやつ。角川のはね、注文来るんじゃないんですよ。できたら私が、杉岡（中）さんにできましたって、原稿渡すの。

かすかなることと思うな月のぼる東の空のほへえ
むものを 「短歌研究」（平成22年4月号）
ゆくりなき十月十日午後一時 晴天にして雲一つ
ある 「短歌」（平成22年4月号）

角宮 ああ…、そういうふうになっているのね。

由紀子 だから、特別作品なの。できたらいつでもくださいって。でももう、終わり。すべて終わりね。

角宮 ふううん。

由紀子 いつでもよ、ここへ生徒たちが座るでしょ。と、すぐ歌出しなさいってね。なにかあるとね、それから歌を見て上げようという気持ちがあるんでしょうね。それは、やつぱり向こうへ行ってもそういう気持ちがあるんだけれども、いまはそれがもうないし。あの桂一郎からももうものなにもないの。それでも来てくれるってことは、ありがたいと思う。いまだに、毎月来てくれる人たちがいるのは。もう来てくれるなっていうの。ほんとうに、もう。それでもいんだといって。先生の顔をちよつとも見たいから、お邪魔しないから。お弁当もつてというかたちでね。いろんなかたちでありがたいと思っている。ほんとにありがたい。桂さん、たとえわかんないっていうにしろ、ぼつとしているよりもなにかの刺激があったほうが、桂さんのためにもいいの。だけど、来てくださるあなたたちにすまないと思うのよ。ひっくり返って救急車だけだつてもう、十何回乗っているんですよ。どのくらい、大変だったかしれやしない。戦ってきているの。もう、病院でのこと、施設でのこと。老健とホームと病院と違うのね、みんなね。それぞれで私は、どのくらいの思いをしてきたかしれやしない。常識がないってか、常識がないなりに桂さんのことで戦って…。

角宮 うん。

由紀子 こちら（けいあいの郷 緑園）でも、いま八、九ヶ月なのかな。あなたみたいに雨の日でも、風の日でも、毎日来る人はこの一年以上やっているけど、初めてですっていわれているの。嫌われているの。毎日行って、うんこはどうですか、おしっこはどう

ですかって、年がら年中来て。介護の人より私のほうが詳しいんだから。で、桂さんのことを毎日知っているから、あなた大変なのよ。どこ行っても、私は十年間というものの、どこどころへ行っても戦ってきたの、はつきりいうと。多くの人は中へ入れたら来る人がいない、家族が。私みたいに朝晩行つてね、食事をこうして…、する人なんかいない、いない。

角宮 入れたまま。その話は聞きますけれどね。

由紀子 ほんとうにそう。で、もういろんなことがある私には。いわゆる毎日頭下げてよ。お願いします、お願いします、頭下げながらね。

角宮 戦ってきた…。でも、毎日行けるところに、ほんとうに入れてよかったですね。

由紀子 こもね、十三人待ちだったの、実は。

角宮 それは特別療養所という、特がつくところで。由紀子 ありますよ。それは新橋ホームのほう、二、三年待ちですって。月五、六万以内でしょ。桂さん、いま十七、八万ですよ。個人部屋だから。

角宮 あ、個人部屋。

由紀子 それでも十三人待ち。ね、ところがね。四ヶ所当たって、舞岡のほうでね、介護4ですぐにいらつしやいて通知が来たの。私、舞岡…。バスに乗って、戸塚から地下鉄に乗って。また歩いて片道十五分。それ、毎日行こうと思っているから、これはできないと思って。その通知をもって、いま入ったところに毎日三日、三日通ったの。しまいにはもう、わんわん泣いちゃう。ゆっているうちに泣いてきちゃうの、切なくて。私はここしかないんですよ、ここに入れてくださいってゆってね。泣いてお願いしたらね、四日目ね、電話で入れますって。入れてくれたの。だからね、打てば開くっていうのよ。

十三人待ちだのって、十三人死ななけりや入れないんだから、ね。

角宮 まあ、そうだね。

由紀子 何年か、わからないでしょ。毎日そうやって戦ってる。

角宮 打てば開く、ね。

由紀子 ほんとに打てば開くの。やんなくちゃだめよ。なんだって。

角宮 はい。打てば開くね(笑)。

由紀子 少し年下だから、偉そうなこというけどさ(笑)。いろんなことあるから。これからの人生のことを含めて、いろんなことあるから。ただね、自分が悪いこととして相手にそんな迷惑を…、だからね、私のいつていること無理ですかって聞くのよ。ね、ひとつも無理なことないの。朝、血圧計ってね、熱計ってことなんかよ。それを…、かわいそ、やっぱり足りないのよ、介護の人、足りないのよ。

角宮 そうですってねえ。

由紀子 介護の人、大変だってことわかるの。けどそれほど、それほど大変なことじゃないのよ。私は毎日血圧をいつもずっと何秒かでやっちゃうんだから。だから、いまはひっくり返るようなことは何年もないんです。六、七年もない。前は何回もひっくり返ったけど。それは血圧を計ることで、低かったらすぐに…。前の梅が、一本二十キロとれるの。

角宮 ほ、ほう、ほほ…。

由紀子 梅干しつくったり、梅酢つくったりね。すぐにお茶に梅入れて、血圧が低い場合は飲ませます。と、上がるでしょ。それによってひっくり返ることはなくなるでしょ。そいなかたちでね、さりげなくばっばつと対処できる。ここにいてくれるんだから、いつも一対一。それを向こうで、一対一できつこな

いよね。無理よね。娘も嫌われるから、ママいうんじゃないよってね。向こうに預けたんだから、やってもらいなさいっていうの。わかりましたっていうけど。半分以上はやっぱりやってる。嫌われてもいいの。

角宮 嫌われてもいいわよね。うんうん。覚悟でね。

由紀子 覚悟でね。いろんなかたちでね。

角宮 十七万かかるんですね。

由紀子 でも年金でできるんだから、年金で。あと私のはなし崩しで、ちよつとした年金もらえしね。まあ食べるなんて高が知れてるんだから。それは大丈夫ですよ。いまのわれわれはいいけど、あんた、娘たちの、孫たちの時代は、もうどうなるかわからないけどね。

角宮 うん、大変な時代になってきているからね。

由紀子 私はもう若いときから、働く者の、貧しい者の、常に大鵬、巨人、卵焼きが嫌いで、最下位が優勝するまで応援するとかね。なにしろ力のないもの、低い者、弱い者、そちらのほうに触覚が動くのよ。高級っていうの、あんまり、だめなの。

角宮 私もだめ(笑)。

由紀子 桂一郎はそういうこと関係なく、やっぱり理解できるほうね。

角宮 え、え、そうですね。

由紀子 性格は、違うけれどね。

角宮 でも、いいご夫婦だね。

由紀子 ありがたいと思う。

角宮 毎日が戦いで、大変だろうけど。

由紀子 いまもう。桂一郎がほんとうにね、ほんとに由紀子の由の字もいわない憎らしいやつなのよ。どのくらいね、別れようと思ったか…。おばあちゃんのこともあるしね。わけわからなくて殴るか

ら、ね。お袋にどうして優しくしてやんないんだって。そのとき純を妊娠してたのよね。そんなときに後ろから来て、なんで殴られたんだかわからない。普通の夫婦喧嘩とは少し違うね。だまつていて殴るのよ。

角宮 えっ…、突然。

由紀子 そう。私ね、思ったの。合気道でも習おうかなって…(笑)。向こうから来たたら、ぱつとね。

角宮 うんうん、打ち返すね。

由紀子 ほんとうに思ったもの、ね(笑)。

角宮 それでも続いて。夫婦ってなにかと思いますよ。夫婦っていうのは。ここまで来ると私。出会いがあつて夫婦になつて。別れる人いっぱいいるのに、私のこと思つてもよく続いたと思う(笑)。

由紀子 二十六でおばあちゃんが後家さんになつて、そういう人とずつといたからね。そのことだけでも…、差別されたから私は。いまになるとわかるの。結核で死にかかる…。だから、死ぬ死ぬつ、桂さん、死ぬ死ぬつてよくいう…。あんたいくつて(笑)。おばあちゃん、怖くて怖くて自分より息子が先に死ぬかと思つて…。食べるのも全部、分けへだてされた。帰される、弱い嫁さんの頃は。食べるものからね、なにから、布団だつて…。もう、私はコロンビアで働いていたのよ。すごい、あの稼ぎ…。

角宮 よかつたんですよ。

由紀子 そういう華やかなこと、してたんだからね。それが、お布団なんか干せないわけよ、お仕事してれば。桂さんのお布団はあったかいわけよ。そうすつとね、涙が出てくるの。ああ、むかし母は、実家の母はよ、布団を干してくれた、お日様の匂い、これがお母さんの匂いだなあといつてたのが。もう、私のは雨でも降れば何日も干せないわけよ。寮から、

窓からやるぐらいでね…。

角宮 むかしは膨らんだからねえ。

由紀子 そうするとね、抱かれながら涙流していたで、彼にはその意味がわかんないわけなのよね。それで夫婦でもそうやって、なんで女房が泣いたかもわからない、いちいちいわないから。いったつてしようがないからね。そういうことの積み重ねだからお互いにね、夫婦でもね。

角宮 夫婦でもいろいろある。

由紀子 いろんなことあったからね。差別っていうのはね、やっちゃいけないよね。だから、私、嫁さんにもしたくない。同じようにね、娘と同じようなこと、あげるとき同じようにする。心は違うよ。やっぱり嫁さんと娘は、ちよつと言葉遣いも違うけどね、でも…。

角宮 うんうん、差別はいけないわねえ。

由紀子 ううん、いろんな思いしてきましたよ。いまはそういうことない。ほんとにいまは、謝っています。おしゃべりなおばあちゃんですね。お茶飲んでおしゃべりしたかったんだと思う。そういう時間があつたら本読んでいたかった。桂さんと同じ。桂さん自分の部屋に鍵かけた、親が入らないように。親類、そういう商売人の…、嫌だったから。

角宮 いやだったのね。

由紀子 嫌いだった。自分の一族が。それが折角来た嫁さんが同じようなものだから、やっぱりおばあちゃんにしてみれば、がっかりしたでしょうね。私は、そういうおばあちゃん好きじゃなかった。

角宮 そういうおばあちゃんが多かったよね。

由紀子 そうそう。悪いけど、ほんとうにそう。寮だったから、習志野の国立病院の。もう、それぞれのうわさがいろいろあるの…。方代がようやく帰っ

てくれたかと思つたら、また窓から入ってくる。電車がなくなつちやつたからつてね。方代さん真ん中に寝つこないのにさ。両方で足をこちよこちよやつて、俺あ、眠れなかつたよつて、おばあちゃんにいうの。と、おばあちゃんが嬉しくて嬉しくて、そういう話が好きなわけよ。だから、おばあちゃんと方代さん、また仲がいいわけなのよね。年がら年中もうね…。いろんなことあつた。ほんとうにもう、そんな話したら切りがないくらい。

角宮 でも、ほんとに奥様は歌が好きなのよ。だから続いたの…、そうですよ。

由紀子 はつきりいつてそうね。いま私、下手な俳句のほうを…。先生がいなくなつて代わりに、行かないわけにいかなくてやつてますけどね。山、私何十年もやつてんのよ。ヘルパーを毎月連れてゆくには、自分が下見するでしょ。一週間に二、三回、山やつてたの。大山だけで一四七回登つてるの。大山だけでよ。日本国中駆け回つていた。そのころ桂さんは、横浜の高島屋だの、そごうだの教えていて。

角宮 楽しかつたでしょう、そのとき。

由紀子 別々よ。ふたりとも。

角宮 別々だから。

由紀子 別にあんまり喧嘩もしない。もうおばあちゃんいないから。でもやっぱり、ある程度もう、桂さんが具合悪くなつてから、ほんとうにいまね。十年ぐらい前から、ああ、これが夫婦なんだつて感じ。ほんとうに桂さんが、私を必要としているから。

しずかなる夜と思うな午前二時「由紀子」と呼びし声のさびしさ 『竹叢』

コトコトと静かにうごく人が居て梅の花びらひらくしのめ 『竹叢』

由紀子 こいでね。桂さんが私のものになつたと、恥ずかしい言葉だけれど「涙声」。

角宮 あ、ああ…。

由紀子 わけのわからない男をね、私は追い求めてたんだと思う「涙声」。

角宮 ああ、そっか…。すごいね、夫婦つてね。

由紀子 いま感謝してくれてる「涙声」。由紀子、由紀子つてね。そうですよ。

角宮 わかるわね。

由紀子 もう、だから私は、あそこへ入れてしまつてね。入れたくなかつたけれど、入れてしまつたつていうね、贖罪があるからどんなことあつても会いにゆく。入れてしまつた。私は悪い方すれば、捨ててしまつたと思つてる「涙声」。

手に触れし涙のしずくあるように月の雫はゆずり葉の上 『一点鐘』

角宮 ここに置いとけなくてね。入れたけどね…。

由紀子 うん。ここにいたかつたけれど。桂さんも立てない、私も腰が…。十三年間、在宅で介護したけど…。

角宮 それでも通えるところに来てくださるから…。行つて面倒もみて、奥様しか頼りにならないわよね。

由紀子 ほんと。どんなことでもしてあげたい。おかしいけどね。

角宮 あのだ、下の世話できるつていうこと。ほんと…、そうですよね、その面倒みてもらうほうにとつてはねえ。みんな委ねるわけだからね。

由紀子 この8月に、桂さん熱が出ました。九度いくつの、風邪で。そのときは、肺炎にならなかつたの。

帰ってきたけど。そのあと、血圧を下げる薬を飲んでひっくり返っちゃったの。それで驚いて…。いまだったら、ここにいたら、私は驚かない。年がら年中だから。私は人工呼吸の資格もっているの、消防署の。ここで、何回も桂さん生き返らせているの。私にここにいれば、入院させないで済んだけど。向こうの人が驚いて入院させたの、この8月に。それまでね、こんなじゃなかったの。もういま、入院してまあ一ヶ月ちよつとでしょ。ほんとうにだめになっちゃった、頭が。それでなくてもだめな頭が。ほんとうに、木の葉が落ちるようにみんな脳細胞が落ちちゃって。いま、「歌壇」から長いこと注文が来なかったんだけど、短歌が来てね。どうしようか、この4月でほら、「短歌」と「短歌研究」出したでしょ。それでおしまいといったけど、巻頭になって、八首ってね。ちよつと私も巻頭についていうんで…。それまで、こつと紙と鉛筆をもつて書かせるとばつと、頭が壊れているくせに…。

角宮 ええつ、書くつ。

人間のいのち移ろうからくりを見ているような枯れ葉いちまい 「短歌研究」(平成22年4月号)
まっすぐに果てるいのちに力がある夕方にわれは思うよ 「短歌研究」(平成22年4月号)

由紀子 ううん、できるでできる。やつてたの。それが、8月の入院でもって全くできなくなった。で、いま五、六首あるから、あと二、三首だったらばできるかと思つて、上手にゆつていけるけれど。いま、岡部桂一郎の桂の字がわかんなくなつてきちゃつた。急に。いま、だから一週間ともいえないの。これ、どうなつてこうなつちゃう…。ほんとうにすごい。

角宮 ええ…。

由紀子 ほんとうに、そう。あつという間、あつという間にこうなつちやつた。

角宮 病院に入つたせいか、それとも年齢かなあ…。

由紀子 いや、8月の…。なにもしない、ただ、ベッドにいただけの…。

角宮 いるだけだからね。

由紀子 いるだけでそれだけ。もう脳細胞がこつと落ちてつちやつた。ほんと。こんなひどくなかつた…。ひどいもんですよ。だから、行つて、どいだけのお話ができるかわかんないけど。切ない、ほんとうに、切ない。

角宮 脳細胞が落ちる…。

由紀子 だから、病院つていうのも、私もそのことがあつてから、こんだあ、いまあのホールの人に、どんなことがあつてもすぐに入れないで、私に連絡して。もうね、病院で死ぬんじゃないの。ここで死なせてください、あるいは家に連れて帰つてきて、ここで死なせてください。病院では死なせたくない。病院は嫌い。ほんとうに病院は、だめ。

角宮 ああ、そう…。

由紀子 なにか私、乱れちやつたね…。

角宮 ううん。

由紀子 いまね。ありがとうつ…。もう俺はなんにもいうことないよつて、ね。俺は幸せだったなあつていつてくれる。うふふ…。

角宮 いつてくれるの？

由紀子 ああ、いつてくれます。きのうはね、由紀子、手を握らしてくれつてつて。

角宮 えええつ。

由紀子 手を握つてね、由紀子の手はいつも温かいなあつて。

角宮 じゃあ、わかつてるんじゃない。

由紀子 うん、わかつてることたくさんありますよ。わかんないときはただもう、痛い痛い痛いつて同じ…。壊れたレコード、壊れた、レコードになつちゃう…。

角宮 でも、ありがとうつていったんだ。

由紀子 もう、うん。だからそれ聞いてね、墓地の話もしたし。お墓も見せてね。東京の、八柱霊園(東京都立八柱霊園)。

角宮 千葉でしょ。

由紀子 そう、場所は千葉(千葉県松戸市)のね。桂さんもここ。おばあちゃんも入っているし、桂さんも入るんだよつて、ね。桂さんも入ったら由紀子も入るよ。二人のお骨掻きまぜてね、一緒になろうねつていったらね、桂さん涙ぐんでたね「涙声」。私も嬉しかった。もうそこまで話してね。やつぱり、死ぬことは怖いよ。なんとなく不安なの。だからね、大丈夫だよ。桂さん、ここに入つて、由紀子も入るんだよつて。とつても嬉しかったみたい。目頭赤くしてね、喜んでくれた。もうゆうことないです。もう、いつ死んでもいい。うふふ。

角宮 でも、その言葉聞いたら、報われたね。

由紀子 報われた「涙声」。

角宮 長かったものね。ああ、でもそこまで到達したのね。夫婦がね。よかったあ…。

由紀子 六十二年間だから…。

角宮 ううん…。

由紀子 長いね。まあ、そろそろ出かけましょう。

風吹けば頭上にたかく光りつつ竹の枯葉は竹林を
出る 『戸塚閑吟集』

——門を出ると、坂道を隔てた空き地の向こうに竹林が揺れる。坂道をさらに登ると前方にも竹の交差。竹のさやぎを残しつつ人々が暮らし始めた、そんな竹の里。その道を右に曲がると、道に溢れるように草花や木のある家が見えた。

由紀子 「ゆつくりと塩田^{しおだ}さんまで風船かずらいろいろいざぼん」なんていうの。

角宮 風船葛ね。

由紀子 これが黄色い花が咲くの。ザボンじゃ…、レモンだと思うんだ。ここ、塩田^{しおだ}さん家。歌ありますよね。これが黄色くなるの。これがね。

角宮 これが。なってるじゃないですか。

由紀子 これが黄色くなるんですよ。

角宮 へえ、あれ、ザボンですか。

由紀子 レモンですよ。

角宮 レモン。おばけレモンだ。

ゆつくりと塩田^{しおだ}さんまでつく杖の風船かずら
いろいろいざぼん 『竹叢』

角宮 わあ、随分そこそこから見晴らしが…。

由紀子 この階段は降りないでね、ここまで行って、また、戻ったりね。

径なれど傾くゆえに人ゆかずたちまちに過ぐ十年
のみち 『竹叢』

角宮 わあ、やつ、やつ。

由紀子 やつ、とか、やつとかいうでしょ。

角宮 鎌倉なんかでもいうわね。

由紀子 たにのことね。

角宮 ええ。

由紀子 みんな、ほら。

角宮 すごいね、これ。

——風の吹く高台。ここから谷の底の道へと一気に伸びる階段がある。人ひとり歩けるほどのコンクリートの長い階段。岡部さんへと風切る足取りの由紀子さんと傾斜に揺らぐ角宮さん。階段のわきの斜面には狗尾草、泡立草など秋草の間に長葱の行列。右側は崖で、網が張られている。新橋宮古公園の森は間近に深い。降りた角には、一本の大きな柿の木があり、それにそって左に曲がる。また、緩やかな登りが続く。

立ったまま笑いこころげる葱坊主黙って風の通る葱畑 『一点鐘』

日の暮れて顔を上げれば鳥わたる空ゆくものに道はあるのか 『竹叢』

由紀子 草柳さんは、でも、いまどうなの…。なによ、痒い痒いって、おできって。

角宮 おできができるの。むかしっから。

由紀子 八つぐらい若いよ。桂さんよりも、確か。からだのほうは、治まっているんですよ。症状はね。

角宮 ええ。治まっています。

由紀子 シヤイな男だからね。

角宮 そうです、シヤイね。人を傷つけないしね。

由紀子 そうそうそう。お互いに子供が小さい、赤ん坊の頃からの付き合いだからね。その写真探したんだけどなあ…。

角宮 ああ、それがあつたらよかったね。草柳さんとのね。

由紀子 みんなお互いにきれいだったわ。私も。あらまあ、きれいだったわって(笑)。

角宮 きれいだったでしょう。若いときのつてきれいですよねえ。これが、私かと思うほどのね(笑)。

由紀子 草柳さんの奥様って、美人だったんですよ。角宮 そうだったでしょ。追いかけたんですよ(笑)。

草柳さん、うんと追いかけて、やつとお嫁さんになつてもらったんだと思うよ(笑)。

由紀子 草柳さんだつて、いい男よ(笑)。

角宮 そう。そう。

由紀子 私も、『胡麻よ、ひらけ』好きだったから。

角宮 ジャンギヤバンみたいだわって、私がいつたことがある(笑)。私が折角ジャンギヤバンっていったのに、誰かが 片岡千恵蔵みたいねえって(笑)。

——バス道路に突き当たると、左の見晴らしのいい下り坂をゆく。スピードを出す車が行き交う。落ち葉が歩道へと吹き寄せられて、足元に枯れ葉の音。

由紀子 上から三階、下から二階の、窓開けている、左の…。

——指さす方向に、明るいベージュの壁面に白い枠の、「けいあいの郷 緑園」の建物が見える。岡部さんの部屋の窓は、カーテンを開け放ち、ぼつんと黒く、由紀子さんを待っているかに見えた。

由紀子 あそこからこの坂見えるから、坂を登ったり降りたりして由紀子は来るのよって…。だから一番最後の歌にね、4月に出したね、「施設タぐれ」っていうのが、二十首ぐらい出したの。「あの坂を

登って由紀子は帰るのか」っていうでしょ。私がばつと、書き留めるわけ。「あの坂を登って由紀子は帰るのか」って書くでしょ。

角宮 いいね、その言葉。

由紀子 桂さんこのあとにつけてよ、ほら、あすこに木が揺れているでしょ。「すすきが…」。うん、「すすきが揺れている」って、ってなたちで…。できなくなるとそうやって、桂さんがいった言葉を、私が書き留めてっていうかたちでやって…。もうね、うまくなろうが糸瓜もなんにもない…、自然体。ほんとの、自然体。

あの坂を登って由紀子が帰るなり枯れたすすきが揺れているところ 「短歌研究」(平成22年4月号)

——玄関を入ると、うがい菓の入った小さな紙コップを渡され、うがいをする。エレベーターで二階にゆく。「さくら四丁目」と書かれた入口に入る。そこには、机、椅子、テレビなど置かれた、明るく広い団欒の場所がある。車椅子に座った岡部さんに、由紀子さんは駆け寄る。

岡部 由紀子、腰が…。

由紀子 腰が痛いのか？ 待っててね。待っててよ、桂さん。

——「まっててね、まっててよ」と語りかける音がころころ転がって、「けえさん」と呼びかけるなかに吸い込まれてゆくようだ。

由紀子 悅ちゃんですよ。

岡部 岡部桂一郎といいます。

——岡部さんの部屋に移動する。

岡部 暑い。

由紀子 暑いですね。暑いですね。

角宮 狗尾草と曼珠沙華。

由紀子 あ、これもう捨てなきゃだめだ。ああ、今日、金木犀もつてこようと思つて、忘れちゃったあ…。

もう咲いていたのか木犀匂いくる十月二日 月日
おぼろに 『竹叢』

由紀子 桂さん、この景色がね、好きなの。景色が桂さん好きなのよ。

——南向きの大きな窓から、日が差し込んでいた。外を見ると、前の細い道路を越えたところに秋桜が揺れ、そこから畑が広がっている。茄子、長葱、白菜、里芋、青菜、豆…、側に一件の農家が見える。土を慈しむように耕された畑に、蝶が飛び、菊の花々が咲いている。その向こうは、新橋宮古公園の森のような濃い緑の森が横たわる。この畑の右に、さきほど降りてきた坂道が見える。

音のないしんとした空より湧くように黒いガラスの盛りあがる森 「短歌研究」(平成22年4月号)

由紀子 桂さん、横浜からね、むかし角宮悦ちゃん、悦ちゃんって、桂さんゆったんだ、草柳さんと。

岡部 ああ。

角宮 横浜歌人会の…。

岡部 ああ。

由紀子 横浜歌人会の角宮悦ちゃんです。

岡部 ああ。

由紀子 大きくなったでしょ。

岡部 あ、ふつくらしたよ。

由紀子 ふつくらしてるって。

岡部 べっぴんさんだ。

由紀子 かわいいね。若いとき、かわいかったね。

岡部 うん。

由紀子 むかし会っている。悦ちゃんっていつた。どういう仲だったの。

岡部 それはねえ、みんないうから。

由紀子 ああやっぱり、いうからなんだ。そうか、ね。

角宮 草柳さんが、いつてたんだ。

由紀子 桂さんもいいかったんだ。

岡部 うんうん。

由紀子 こいでわかった。こいでわかった。どうして、悦ちゃんというのかなって。ほんと私、不思議だったの、もう。ねえ(笑)。

岡部 ああ。

由紀子 今日はね、岡部桂一郎さんに会いたいわってね。二人が来てくださったの。

岡部 ああ、ありがとう。すいません。ありがとうございます。

——角宮さんが、隠れファンを紹介すると、

岡部 光栄です。

由紀子 光栄ですって。

岡部 生きているのは、よかった。

由紀子 そうか。生きていると、いろんないいことが出てくるねえ。

岡部 ええ。

由紀子 隠れファンに会えたねえ。

角宮 よかった。もう、大丈夫じゃない。



岡部桂一郎さん

岡部 だけどね。隠してることはね、あからさまに出てくる、ありがたいと思う。

由紀子 生きていれば、いろんないいこと出てくるねえ、桂さん。さあ、目やにとか、お鼻拭いてください。目やに拭いて…、九十五歳に見えないでしょ。

角宮 見えない。見えない。

由紀子 立てばね。腰さえちゃんとしてれば、ほんとに九十五歳には見えないの。八十代だよ。

角宮 八十代、皺がない。

由紀子 私なんかよりずっと、桂さんのほうが皺が

ない(笑)。

角宮 つるつ、つるつしてる。

由紀子 ああ、きれいになった。禿ちゃんもちよつと、拭いてね(笑)。

岡部 ゆっくりやってください。ゆっくりやって…。

角宮 恥ずかしがつてるんじゃないですか。

由紀子 もっと、ゆっくりやられて。なにしろ、スローが好きだから。こっちのきれいなほう出して、手を拭かせてください。ゆっくり、ゆっくりよ。

——写真を撮らせてください。カメラを向ければ、

岡部 これが、岡部桂一郎と申します(笑)。

由紀子 岡部桂一郎の素顔です、ね。これが桂一郎の素顔です、ね。今日は、腰が痛いから…。昨日は、由紀子そこへまっすぐ立ってみろつて。立ったらね。ああってね、大きな声出してくれて。ね、桂さん。

岡部 えっ。

由紀子 きのはね、そこへ立ってみろつていわれたの。立ったの。

角宮 見たかったの。

由紀子 初めてだったの。そんなこといわれたことないものね。立ってみろつて、立ったの、ね。ああ…、つてね。なんだか知らないけど、大きなため息つかれた。ね、桂さん。

岡部 ああ…。

——話しながら由紀子さんは、車椅子を拭いてゆく。

由紀子 この人がトイレに入るとき、いつでも下拭いて。みんな嫌な顔するけれどね(笑)。金隠し拭いて、下拭くの。

角宮 嫌われても、いいんだものね。

由紀子 なんだっていいの、拭くの。私が拭かなければさ、そのまま…。

角宮 つぎの人が。

由紀子 桂さんが…、桂さんでいっぱいだよ(笑)。

角宮 桂さんで、いっぱい。

岡部 弟。「曾孫さんの写真を指して」

由紀子 弟、この人。そうかなあ。義雄さんは、六十年前に死んじゃったよ。

岡部 そっかあ。

由紀子 ソロモン海峡で死んじゃったねえ。

岡部 ソロモン。

角宮 戦争でね。

岡部 そっか、戦争で。

由紀子 義雄さんが、泣いて帰ってくると、誰が泣かせたんだって、俺が敵をとつてやるつて、桂さん、家を飛びだしていったつてねえ。

岡部 ああ。

由紀子 そのあと知らないけど…。どうしたか知らないけど。ねえ、桂さん、ね。

庭土に埋めし石のありどころ薄日さしつ切なく
思う
『緑の墓』
里芋の畑の上に月が出て逝きたるものはもう帰らない
『一点鐘』

——トマト、キウイ、リンゴにバナナ、サツマイモ、

そして卵の花…。一口の大きさになって、四角いタッパーに入っている。色とりどりの小さな畑。

角宮 お食事ですか？

由紀子 いや違うの、私がいつももってゆくもの。毎日行くっていうことは、そういうことがあるの。やっぱり、お野菜が少ないので…。私、異常なの、桂さんに対して。排便のことがね。そのことでね、私毎日もってゆくの。野菜とか、果物を…。

嘔むという喜びがある朝あさのトマト人参キャベツ玉葱 「短歌」(平成22年4月号)

由紀子 もうこのくらいの時間だと、もう三時半だけだね。いつも早く来るでしょ。三時半には終わっちゃうのよ。三時を食べたり、食べなかったりね。こいで、いっぱいになっちゃうから。あの、いつもこれはね、桂さんのお通じのために、いつも…。

角宮 うんうん。

由紀子 三年前にお腹が膨れてね。もしかしたらもしかかなってもう。検査も、手術しなければ検査もする意味ないから。一ヶ月下痢が続く…、ベッドで。どんなに大変だったかしれやしない。あなた、二人三人手がいるのよ。想像できないでしょ。ほんとうに大変だった。でね、腫瘍かもしれないけど、それはそれでいいの。だからね、大変なの。桂さんがそちらのほう、出てくれ出てくれないがね。これもね、八千円で注文したのよ。北海道の熊笹っていうやつ。新聞でね、つるりと出ます。なかなか出ないの…。

角宮 出てくれない。年齢差があるかもね。

由紀子 動かないしね。それでも、少しいかなと

思っ。卵の花、わかるでしょ。お通じの…。

角宮 卵の花いいんですか。

由紀子 そうそうそう。ひじき。ひじきと卵の花で交代でもってくるの。

角宮 ひじきと卵の花が、いいの。

由紀子 うん。ひじきと卵の花、お通じによ。笹の葉、これ普通ジュースだけど。なにしろ飲まないの、水分を。

角宮 水分、飲まない。

由紀子 もう、大変なの水分を飲まずのが。水分にしちゃうと多くなっちゃうから、ヨーグルトのなかに。ここに蜂蜜が入っているけどね…。はい。ありがと。ああああ、それじゃないね、桂さん。そそう、さきにこちのほうを食べてくれないと…。

岡部 由紀子、順番じゃないと入らない。

由紀子 順番にね、順番にね。はい、どうぞ。ゆっくりね、ゆっくりね。ここはね、お野菜が足りないの、見るとね。だからね、こういうのもってくるの。

岡部 美味しい。美味しい。

由紀子 あっそう、よかったね。桂さん、ありがと。桂さんよかったね。これ酸っぱいですよ。

岡部 うん。

角宮 キウイね。

由紀子 酸っぱいですよ。ああ、よく食べてくれる。

——カメラを向けると、

岡部 頭が禿げてるし…。「照れて、手で頭を隠すような仕草」

由紀子 前から禿げてるって(笑)。

岡部 あはあ…。

角宮 前からって…。

由紀子 これね、うすら甘くなってる。

角宮 ミルク紅茶かな。

由紀子 ミルク紅茶なんでしょうね…。ミルク紅茶でした。はい、桂さん。これ飲もうね。美味しいですよ。飲んでみましょうね。水分とろうね。

岡部 「咽せる」胸が痛い。

由紀子 うん。

岡部 胸が痛い。呼吸のね。

由紀子 ゆっくりね。はい、もってください。自分で。

左手は、左手はどうするの。

岡部 だって、由紀子。冷たいだろう。

由紀子 冷たいからって、もたない。だめ、自分でもつの。

岡部 この生きてるときの、この冷たさはね、生きている感じの冷たさと違うんだ。もつとね、不気味な…。

角宮 不気味。

由紀子 まあまあ、どうでもいいよ。

角宮 生きている冷たさじゃなく、不気味な冷たさだつて。

由紀子 やっぱり、理屈っぽいよ。普通の人より。

角宮 そうだね。いまのような…。

岡部 ああ、これ。「おからを指して」

由紀子 ゆっこが、桂さん好きだっていうから、今日もってきたのよ。どうぞ、召し上がれ。大きく口…、気をつけて。ああ、ちよつと危ないよ。多いなあ、危ないなあ。足はのろいけど、手は早いよ(笑)。

角宮 うまく、入ってる。

由紀子 上手だったね、桂さん。美味しい？

岡部 うん。

由紀子 よかったねえ。よかった。嬉しいよ、ね。嬉しいね。具合悪いときは、半分も食べてくれない

の。いいときは食べてくれるしね。だましだましね。
角宮 へえ。そういうときは、どうしても食べないのね。おから。便秘にいいんだ。

由紀子 うんといいですよ、これは。ひじきとね、これは最高。もちろん、バナナとかおさつもいいけれどね。ほんとの薄味。きのう食べたなら、美味しいっていつてくれたからね。一袋買ったらこんなに…。

岡部 美味しいよ。

由紀子 卵も入っているし、いろんなもん入ってますよ。

角宮 奥様つくったの？

由紀子 ああそりやそうよ。こんなものくらいあなた、むかし人間だものねえ。

角宮 卵も入っているの、それ。

由紀子 最後に。口のなかばさばさするのね。ああ、飲んで飲んで。人参、油揚げ、葱。最後ね、少しでもお水が多かったりするとき、卵を二、三個ぐらい入れるとね、あの固まるわよ。ゆるいのがね。

角宮 あ、うんうん。

由紀子 よかった、よかった。桂さん、食べてくれたねえ。桂さん、ありがとうございます。ああ、よかったこと。嬉しい。ありがと、ね。はい、おさつもありますよ。少しずつ、近所のおばさんがみんなくれるの。ね、みんな農家が多いでしょ。

角宮 ええ、つくってるんだ。

由紀子 さつまいも…、桂さんはジャガイモが好き。今日ジャガイモがなかったねえ。

岡部 ううん。

由紀子 ジャガイモが好き。なにもしなくてもジャガイモをチンしてね、お塩ちよつと振るだけでも食べてくれる。

角宮 へえ。

由紀子 むかしほら、私、山へゆくでしょ。長いとき、槍ヶ岳なんかだと、もう三泊四日とかなっちゃうでしょ。と、冷蔵庫にあるものを置いとくんだけど。俺はジャガイモと玉葱の味噌汁はつくれるんだって、えばっていましたよ（笑）。

角宮 美味しいわね。ジャガイモと玉葱のお味噌汁。

由紀子 林檎は秋だからね、たくさん食べてね。

角宮 林檎は、これから美味しいね。

由紀子 ね、桂さんね。食べられる？

岡部 うん。

由紀子 大丈夫？

岡部 大丈夫。

由紀子 そう、よかった。嬉しいよ。

角宮 よかった。

由紀子 おなかかねえ、こんな大きいよ。膨れて…、足もむくんでるしね。だからね、最低三百回。私は五百回くらいやるのよ、一日。脹ら脛をマッサージ。角宮 なるだけ？

由紀子 ここからここへもってきて。朝、寢床でもって十五分、リハビリつてやりますよ。全身寝て足と手上げて、なんでも百回します。ブリッジは六回くらい。いろいろもう、十五分ぐらい。桂さんがいるときは一緒に。そうそう、坂が見えるでしょ。あの坂の自動車が登ったり、降りたりするのが好きなの。

疲れたる自動車日ぐれの坂のぼる一息つきてまた登りけり
「短歌研究」（平成22年4月号）

由紀子 二十四度だから、私はいいけど。あなたたち寒いでしょ。平気、大丈夫、寒くない？

角宮 寒くない。奥様は大丈夫？ 上、寒くない？

由紀子 私、ごめんなさい。これこれ。「服をまくって、肌を見せる」私は、暑がりなの（笑）。

角宮 私も、暑がり…。

岡部 「角宮さんの顔を見て」 そうだ、見たことある。

由紀子 悦ちゃん、角宮悦ちゃん。

岡部 ああ…。

由紀子 ほら、大きな声で、悦ちゃんって呼んでごらんさない。むかし、悦ちゃんつつた。

岡部 悦ちゃん。

角宮 わあ、嬉しい（笑）。

由紀子 やっぱ、かすか、かすかにわかるのね。

角宮 つながった。つながったわ。

由紀子 かすか、かすかね。じつと見てるね。

岡部 ふつくらとしてね。

角宮 嬉しい。よかったあ。

由紀子 ああ、そっちじゃなくて、トマト食べてぐつとぐつと、ぐつと刺して。

岡部 大きい。

由紀子 大きいけど…、あ、ごめんなさい。ゆっこ手洗ったからね。よし、よし。はい、よかったねえ。桂さんね。

岡部 これ、好きなんだ。

由紀子 桂さん、ありがと。ね。ゆっこ、またつくってきますよ。ありがと。食べてね。そうやって、残さないで食べてくれると、嬉しいですよ。ありがと、ね。

岡部 とにかくね。ずっと下がってゆくと町があるんだよ。

由紀子 弥生台のほうね。ちよつとね、むかしのと混同しているの。ここは行ったことないの。ね、ね、町があるのね。

岡部 うん。

由紀子 もうひとつ。ラスト。トマト、ラスト。よかった。ありがと。つぎは、バナナね。

角宮 バラティイー。何種類も、その小さなタップパーに。

由紀子 朝十五、六種類ぐらい、桂さんに食べさせていたの。この人いなくなったら、私、そういうことしなかなあとい。やつぱりでもね、続いているね。

角宮 ああ。

由紀子 おさつもジャガイモも、少しずつみんなこの二、三日もつようなかたちにつくってね。バナナなんかこうだし、果物はそのまますぐでしょ。

角宮 おさつも、トマトも、みんな食べたもんねえ。

由紀子 そう。よかった。終わりね、トマト。

角宮 男の人って、トマトの皮、ああやって出すのよねえ。うちも、食べればいいものをね。口からばいっと出すの、同じだわ。

由紀子 剥いてあげればいいんだけど。剥くのめんどくさいんだよ、もう朝ね…。

角宮 皮は栄養があると思うから…。でも出すのね。

由紀子 ありがと。ね、桂さんよく食べてくれてますよ。そのね、プルーンが一番あとからにしようかな。あと、キウイフルーツ、これで終わりね。よかったよ。今日はみな、食べられそうね。

岡部 ああ。

由紀子 今日はみな食べられそうね。

岡部 うん。

由紀子 ねえ。すごいね、桂さん。

岡部 うん。

由紀子 これいま、桂さん、スプーンで食べようねえ。はい、バナナ終わり、ラストです。あと…、もうやんなっちゃうた？

岡部 もう、いい。

由紀子 これも、便秘にいいと思ってんだけどなあ。角宮 とうもろこし。

由紀子 うん。まわりのね、こういう繊維質が…。

角宮 ああ、そうだね。繊維質がいいのよね。

由紀子 この人がね、糖尿がかったことがあるのよね。糖尿じゃないけどね。そこで図書室通って本を読んだりしてね。入院しますかって。私が治しますって、入院させなかった。全部勉強して食事生活、気をつけて。はい、終わり。こいでプルーン。これ増血剤。この人、鼻血出すんでね。ね、桂さん、増血剤ですよ…。終わり、よかったねえ。

岡部 上等だよ。

由紀子 ありがとうございます(笑)。

岡部 これね、病気になるかといただけじゃない。

由紀子 あ、そう。病気になるかといただけじゃないのね。

岡部 大変だよ、これ。つくった…。

由紀子 誰がつくるの？

岡部 これ、誰かな…(笑)。

竹の葉の頭に揺れて暮れ方をゆくこのからだ支えてくれた。
『竹叢』

由紀子 わかる？ 由紀子だよ。

岡部 うん。

由紀子 わかってくれるの(笑)。

角宮 由紀子の作品です。よかったあ。

由紀子 ありがと。あ、そいで終わり。ラスト。はい、終わりました。よかったね。桂さんね。

角宮 全部…。

由紀子 ちょちよつと、手拭きますか。ね。よかった。嬉しいですよ。桂さん、ありがとね。

今日も食べてくれました、完食。いつも書いてあるよ。日記にね。今日は半分でしたとか、今日は完食でしたとか。ねえ、桂さん、ありがとね。これでね、むかしだったら、歌出しなさいっていうのよ。いなくなっちゃうた。

岡部 量がね、もうちよつとね…。

由紀子 少ない方がいい、ちよつと多かった。

岡部 うん。

由紀子 お腹入ったね。

角宮 歌出しなさいっていわれたら、嬉しいんだけど。

由紀子 むかしはね。座れば、歌出しなさいって。

角宮 でもよかったね、景色の見えるところで。

由紀子 そそそう。あのね、どつかないかな。あなたたち、読んでないかもしれない、施設…、出てないかな…。出てないなあ。これがねえ、寺田由紀夫って書いてある。男と女の間には…、知らない？

角宮 あ、舟歌。黒…。

由紀子 いつもね、二人でね、唄った…。

角宮 え、あの寺田さんとか。

由紀子 むかし寺田由紀夫と、ほら、北海道、釧路なんか行つたときに、蕎麦屋でもってね、酔っぱらつたときにね、すつと立ってね。寺田が、もう、今から三十年ぐらいむかしでしょうね。かつこよかったわよ。これ唄つたのよ。もう、惚れ惚れしちゃうくらい、も、好き。

角宮 この歌いいねえ。

由紀子 で、これを教えてくれて…。手紙出したらこうやって書いてくれて。夜、酔っぱらって字がおかしいんで、また朝になって書き直しましたって、書いてある。ほんとうに歌の人たちのつながりが懐かしい。ほんとうにね、いい人ばかりなの。

角宮 黒の舟歌ね。

由紀子 そう。黒の舟歌。

角宮 それ、寺田さんの字？

由紀子 そう。いつも、二人で唄うの。腰が痛い、痛いっていうときもね。それを唄うと、ゆっている間は、忘れて唄ってくれるの。

角宮 この歌、好きだなあ。

由紀子 うちにね、この読売新聞のね、待田晋哉っていう人が来てね。純粹で鈍足の歌人っていう、この言葉が私好きなの。

——「読売文学賞の人(5)」の見出しに「純粹で「鈍足」「孤高の歌人」とある。このインタビューのなかで、岡部さんは次のように語る。「短歌の」定型はいやらしい。人間を甘えさせ、なあなあにする。リズムを作るのが得意な人は、すぐに上手な歌ができてしまう。その先に一歩進まなくちゃあいけない」。

(「読売新聞」平成20年2月8日)

3に5を足せば桂一郎9になるなあ？そんなむずかしいこと聞かれても 『一点鐘』

由紀子 ねえ、桂さんの、好きなあの…、竹林の中に帽子落ちてるっていうのあるでしょ。あの世とこの世の地続きで、竹林の中、あ、昼だ。竹林の昼帽子…、初め、中だったの。それをね、竹林の昼にしたのよ。竹林の中は当たり前だから。竹林の昼帽子落ちてる。あの世この世は地続きで、ねっ。ほんとよ、あの世この世、地続き。いつもそういう…、いろいろ話して笑ったりしてんのよ、もう。だってあの世とこの世とつながってるもん。

角宮 つながってますよ。

あの世ありこの世もあれど地続きで竹林の昼帽子落ちてる 『一点鐘』

由紀子 この人、結句の転換がうまいのよ。七七がね。

角宮 七七がね。あれが成功しないと、だめなの。

由紀子 そう。平凡な歌が、ここでひっくり返ったりするね。えっっていう、思いがけない、展開がね。それが、この人うまいと思う。

夕かげを歩めるわれは人にして額つめたし花とずるとき 『木星』

うつし身はあらわとなりてまかがやく夕焼空にある遮断機 『木星』

角宮 うまいね。でも、よかったあ。今日ね。

由紀子 はい。ありがとうございます。私もよかったです。いろいろお話聞けて。

角宮 ああいうお話ね、する人いない。自分の胸のなかに眠っているものが、今日目覚めたって感じ。

由紀子 ほんとうにね。今度ね、横浜歌人会の会報っていうのにな、桂さんと草柳繁一さんと、最後の親友っていうか、二人しかいない…。草柳さんも自分から訪ねてこないほう。桂さんも訪ねていかないほう。だから、心では通じるころがあっても、お互いにしげしげと…、しない。

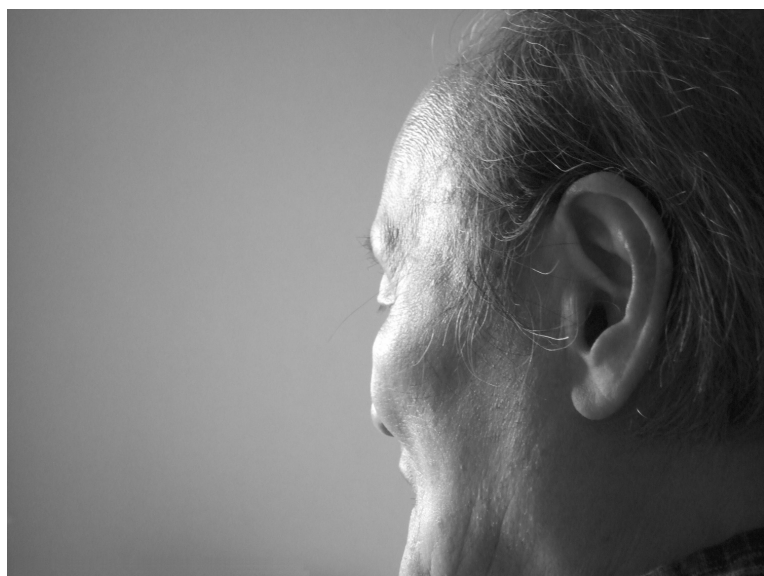
角宮 世俗とは、ちよつと離れているもんね。

由紀子 草柳さんが若いから、六つか、八つか若い。

岡部 男と女の間には、深くて深い谷がある。深くて深い谷なれど エンヤコラ

岡部・由紀子 舟を出す

由紀子 あなた、突然。唄い始めたね、桂さん。あ



岡部桂一郎さん

ら…、桂さん、これ好きなんだね。

角宮 これ、いいねえ。

由紀子 桂さん、好きなんだ。男と女の間には

岡部・由紀子 深くて暗い河がある 誰にも渡れぬ河なれど エンヤコラ 今夜も舟を出す

岡部 これは、自信をもって唄える。野坂って…。

由紀子 野坂っていう人ね。ローエンドロー

岡部・由紀子・角宮 ローエンドロー ローエンドロー

由紀子・角宮 ふりかえるな ローオ

岡部・由紀子 お前が十七俺十九 忘れもしないこの河に ふたりの星の

由紀子・角宮 ひとかけら

岡部・由紀子・角宮 流して泣いた夜もある

由紀子・角宮 あれから幾歳漕ぎつづけ

岡部・由紀子・角宮 大波小波

由紀子・角宮 揺れ揺られ 極楽見えたこともある

地獄が見えたこともある

岡部・由紀子・角宮 たとえば男は阿呆鳥 たとえ

ば女は忘れ貝

由紀子・角宮 真赤な潮のみちるとき

岡部・由紀子・角宮 失くしたものを思い出す お

前と俺との間には 深くて暗い河がある それでも

やっぱり逢いたくて エンヤコラ今夜も

由紀子 舟を出す

岡部 これ。

由紀子 うん。いいね。

岡部・由紀子・角宮 ローエンドロー ローエンド

ロー ふりかえるな ローオ ローエンドロー ロ

ーエンドロー ふりかえるな ローオ

由紀子 ね。

角宮 わあ、よかったあ。

由紀子 ね、桂さん突然に唄い始めるとは思わなか

ったよ。

角宮 すごい。

由紀子 ねえ。急にねえ。

角宮 わあ。

由紀子 初め、腰痛いつつたのに。おかげさまで

した。うふふ。よかったあ。いわないよ、なんにも、

ねえ。痛い痛いいわない。初め、泣きべそかいたの

に…。治ってきたんだ、よかったねえ。角宮悦つち

やん。

岡部 ああ。

由紀子 悦ちゃん。

岡部 ああ。そうか…。

由紀子 悦ちゃん来てくれて、忘れたね。痛いの、

腰の痛いのがなんか。いい顔してんの。

岡部 ああ。若くなつたね。若くなつたね。

由紀子 こんだあ、若くなつたつて（笑）。だんだん

よくなつてくる…。法華だの太鼓だの、うふふ…。

角宮 わあ、嬉しい。

岡部 エンヤコラ

岡部・由紀子・角宮 今宵も舟を出す

岡部 エンヤコラ ローオ

岡部・由紀子・角宮 エンヤコラ ローオ（笑）。

由紀子 ローエンドローだよ（笑）。

岡部 ふりかえるな

岡部・由紀子・角宮 ローオ

由紀子 ああよかった、よかった。よかったねえ。

元氣よく唄えたねえ。

岡部 ああ。

角宮 すごい。

由紀子 おお、よかった、思いがけない。

角宮 やあ、すごい。

由紀子 びっくりしちやつた。びっくりしました。

もういいよ、もういいもう。

角宮 疲れちゃう。

由紀子 壊れたレコードみたいにおんなじこと、ず

つとやつちゃう…（笑）。よかったねえ、桂さん。

角宮 ずっと唄ってなかったんでしょ。

由紀子 ねえ。

岡部 私とあなたの

岡部・由紀子・角宮 間には 深くて暗い谷がある

岡部 深く…

由紀子 それでも

岡部・由紀子・角宮 やっぱり逢いたくて

岡部 エンヤコラ

由紀子 エンヤコラ、好きなんだ。

岡部 舟を出す エンヤ…

由紀子・角宮 ローエンドロー、

岡部 エンヤ…

由紀子・角宮 ローエンドロー ふりかえるな

岡部・由紀子・角宮 ローオ

由紀子 はあい、もう、終わり終わり。もうこれ、

しまおう（笑）。びっくりしちやつた。桂さん。びっ

くりしちやつた、桂さん。

岡部 なにを？

由紀子 突如、唄い始めたから。

岡部 はあ。

由紀子 黒の舟歌、

角宮 黒の舟歌。

由紀子 野坂昭如のね。俺とお前の間には、深くて

暗い河がある。そうお。

岡部 そう。半分は私の、実作なの。

由紀子 あら、やだ。半分俺の、私の…。

岡部 実作。

由紀子 実作じゃないよ、野坂のだよ、あはは。もう、

自分の思いになっちゃた。感情移入なっちゃったね

え。俺とお前の間には 深くて暗い…（笑）。

角宮 奥様…。

由紀子 おい、おい、おいおい。

岡部 はあ。

由紀子 困るよ（笑）。

岡部 おいおいって、心やすそうにいうなよ。

由紀子 あははは…。

岡部 これでも、腐っても、腐っても岡部桂一郎と

いう、歌人だよ。

角宮 おお…。

由紀子 おいおいって、たやすくいうなよって、これでも腐っても…、(笑)。なんだ…。

角宮 歌人の岡部桂一郎だよ。

由紀子 恐れ入りやした。

岡部 えっ。

由紀子 恐れ入りやした。

岡部 いや、どうもどうも…、あり合わせの、歌人で…。

由紀子 あり合わせの歌人(笑)。

角宮 こんだあ、あり合わせの歌人で…(笑)。

岡部 エンヤコラ 今宵も舟を出す

由紀子 調子よくなってきたあ…(笑)。どういうわけか、調子よくなって…(笑)。

角宮 すごい。

由紀子 あはは、ねじが回ったね、こりや(笑)。

角宮 回りっぱなし…(笑)。

岡部 これは自作だよ、自分の歌だよ。

由紀子 自分の歌になっちゃったあ。

角宮 この歌ね。

岡部 ああ。

由紀子 自分の歌になっちゃったの。

岡部 ああ。

由紀子 ほんとうにねえ。ぱあつと即詠ができた人なのねえ。

岡部 おもえばかなし

岡部・由紀子・角宮 ことなれど

岡部 エンヤコラ

岡部・由紀子・角宮 今夜も舟を出す

由紀子 はい。

岡部・由紀子・角宮 ローエンドロー ローエンドロー ふりかえるな ローオ

由紀子 上手ねえ、桂さんねえ。

岡部 ああ。

由紀子 随分よく、上手に唄いましたよ。

岡部 むかし、やってましたので。

由紀子 むかしやってましたあ。そうか…あははは。突如ねえ。寺田由起夫に手紙書こうかな。

岡部 私とあなたの

岡部・由紀子・角宮 間には 深くて暗い

岡部 谷がある

由紀子 こんだあ、谷になっちゃったのお…(笑)。

岡部 実作なの、自由に換えられる…。

由紀子 そりやそうだね(笑)。自由に換えられるね。お前と俺との間には、そうかもしれないねえ。

角宮 ほんとね、ありましたよねえ。

由紀子 谷や河があつたんだ。

角宮 ねえ。

由紀子 ね、桂さん。

岡部 えっ。

由紀子 いろいろ谷や河があつたねえ。

岡部 ああ。

由紀子 桂さんとも喧嘩しましたねえ。

岡部 ああ。

由紀子 思い出す。知らない。

岡部 思い出す。

由紀子 思い出す。

岡部 うん。

由紀子 あそう…。

いろいろないろいろなことありまして麦藁帽子の黒きリボンよ 『戸塚閑吟集』

岡部 谷がいっぱいあつた。

由紀子 谷が…。

岡部 山のなかだから。

由紀子 ああ、ねえ。

岡部 私とあなたの間には 深くて深い谷がある(笑)。

由紀子 そうか、今度は谷か(笑)。

角宮 谷あり、山ありだもんね。

由紀子 私とあなたの間には、深くて越えない谷がある。そうかな、そうだね。いろんなことあつたねえ。よかつたね。今日、悦ちゃんが来てくれて。こんなに歌、唄ったり、お話ができてね。思い出した、ねえ。むかしむかし、会ったことがあるね。この方にね。

岡部 うん。

由紀子 角宮悦ちゃん。初め読めなくて、かどなのかなあつてね。いろんな読み方があつたのね。桂さん、ねえ。そう…。

角宮 ほんとねえ。

由紀子 よかつた。ありがとうございます。こんな日だったら、来てもらってよかつたねえ。ほんとうによかつたね。

角宮 今日ほんと、よかつたねえ。一緒に、この黒の舟歌、唄えて。

由紀子 よかつたなあ。ほんと、ほんと。涙出てきちゃうよ。よかつたね、人生いろんなことある、ね。

角宮 人生いろいろありますね。

岡部 頭がバーだからね。思い出だけでつくって…、自分の実作だよ。

由紀子 自分の、実作になっちゃったの。たいしたもんだね。その調子で桂さん歌一つ、つくってよ。紙と鉛筆置いておくから、短歌。

角宮 短歌。

由紀子 「歌壇」から注文来て、あと二、三首つくんなくちやいけないんだよ。11月の半ばまで、さあ。

岡部 あんなものあ…、あんなものあ、ふるさかだよ。私とあなたの間には…「黒の舟歌を唄いだす」

由紀子 ここでテレビ見ててね、普通の枇杷と違って、茂木枇杷って大きいんですよ。それ見ててね。幼子の尻にも似たる枇杷の…、幼子の尻に似てるっていうの。そのあとにね、しずかな雨の振りだしにけりってね、ばあつと詠むのよ。そういうのがね、五つ六つあるの。4月号に出したあとでね、できたの。ここの施設でつくってんのよ。だけど、8月から、全然だめになったね。こうゆう高ぶつているときに…、あなたたちが帰ったあとでね。紙と鉛筆でもって、この興奮があるうちに…。桂さん、ね。

——由紀子さんのお話の間、岡部さんは唄い続ける。「深くて深い谷がある 深くて深い谷なれど エンヤコラ…。これはねえ、みな知らないの。実作なの…。由紀子さんは、なんとか短歌をつくらせようと話しかける。

由紀子 ほら、夕方のきれいな雲が出てきたね。
岡部 ああ。

由紀子 ね、いいなあ。どっちに流れているんだろ
うなあ。



角宮悦子さん

夕方がくれば西よりうす紅い真綿のような雲が来るなり
「短歌研究」(平成22年4月号)

夕ぞらの息づかいのようになびきつ森に群がる百羽のカラス
「短歌研究」(平成22年4月号)

岡部 ああ、それは森のなかに、点、点の森があるだろう。あの中に女と一緒に暮らせばいいだろうなあ。

由紀子 ああ、森んなかに、女と暮らしたい。

岡部 ああ(笑)。

由紀子 な、な、なによ(笑)。女って、誰よ。

岡部 ああ。いっぱいくれるよ。いくらでもつくれるよ(笑)。

角宮 虚構の世界で、つくれる(笑)。

由紀子 ああ、桂さん、女の人、あんまり知らなかったもんね。

岡部 ああ。当たり前だよ。

由紀子 うん。

岡部 こつそりやってたから。

由紀子 こつそりやってた。それとも…(笑)。

岡部 ああ(笑)。

由紀子 こつそりやってたか。よかったねえ。私、桂さんでできなかったと思った。ほんとに…。

岡部 ああ。

由紀子 ちょっと、思い出して。誰、それ。桂さん。

岡部 もったいないから、そんなときは、歌をつくって…。「唄いだす」あなたと私の間には 深くて遠い谷がある

由紀子 深くて遠い、いろんな…。

岡部 深くて遠い

岡部・由紀子 谷なれど エンヤコラ

由紀子 ちょっと…、おさまらなくなってきた(笑)。

角宮 おさまらなく…(笑)。

由紀子 あ、桂さん、笑ったよ。珍しい、笑ったの(笑)。

岡部 歌がいかにインチキか、わかる…。

由紀子 歌がいかにインチキか(笑)。

岡部 あなたと

由紀子 もういい、もういいよ(笑)。ありがと、ありがと、ねえ。たくさん唄ったねえ、ねえ。

岡部 むかしはね。全部自分が、つくったよ。

由紀子 つくったねえ。

岡部 あなたと私の間には

由紀子 うん。

岡部 深くて遠い 谷なれど

由紀子 やっぱり、好きなんだね。

角宮 好きなんだ。

岡部 エンヤコラ 今宵も

岡部・由紀子・角宮 舟を出す ローエンドロー

ローエンドロー ふりかえるな ローオ

由紀子 よかったね。今日はね。いい日でしたね、桂さん。

岡部 ああ。

由紀子 悦ちゃん来てくれてねえ。岡部さんの隠れファンですって。

岡部 いやあ。これから…、私が追っかけても、手が届かない(笑)。

由紀子 私が追っかけても届かないって(笑)。私が追っかけても届かないかあ…。若いからね。その気持ちをもつのも、大切よね。男はいつまでたってもね、女のことを忘れちゃいけないものね。

岡部 ああ。

由紀子 いいことよ。よかった。ね、桂さん。ねえ、桂さん、よかったよ。ねえ。いつも痛い痛いのが終われば…、こんだあ、痛い痛いが始まるから…。こ

うやって…。

角宮 いま忘れて。

由紀子 そうそう、ねえ。ありがたい。忘れて、いまこうやってね、お話できていることが、ありがたい。よかった、ね。

角宮 こんなに、お話ができるとは思わなかった。

由紀子 ブレーキからなかったもの…。

角宮 すごいね。

岡部 男と女の間には

由紀子 もういいの、もいいの、わかった…。

岡部・由紀子 深くて深い谷がある

由紀子 河じゃなくて、谷になったんだね。

岡部 深くて深い谷なれど

由紀子 谷が、いいみたい。

岡部 エンヤコラ 今宵も

岡部・由紀子 舟を出す

由紀子 はい。

岡部 ローエンドロー

岡部・由紀子 ふりかえるな ローエンドロー

由紀子 こうやってね、壊れたレコードになっちゃう、ほんとに…。(笑)。もう、もう、いいかげんにしよう。もういい、ありがとう。終わりね。

岡部 下手かな…。

由紀子 いやいやよかったよ。すごく、上手、桂さん。これ食べる。水分飲んで。

岡部 もういい。いやいや。

由紀子 飲んでる、飲んでる。飲んでくれてる。ありがとね。桂さん。

角宮 よかったあ。

由紀子 ありがと。

岡部 男と女の 谷なれど エンヤコラ 舟を出す
(笑)。

由紀子 これがね、壊れたレコード…。壊れたレコードでも、痛い痛いよりはいいけどね。まだこっちのほうが。思いもかけなかった。

角宮 声出すから、いいわよね。

由紀子 そう、いいこと。怒ってもいいのよ。この人無口だからね。時々わけなく、わっと怒るときあるの。それでもいいんですって。私が辛いとき、泣いてもね。心の発散で押さえてばっかりいないでね。角宮 ううん。

由紀子 ね、よかったねえ。今日はいいい日でしたね。

岡部 いい日だ。

由紀子 秋の、秋のね。とつてもいいときよ。今日、金木犀もつてこようと思ったけど、忘れちゃったけど。ね、桂さんね。秋のとつてもいい日。ね、桂さんね。どっか行つて歩きたいね。歩けたったらねえ。

岡部 やつぱり、無理だからねえ。

由紀子 むかし、よく歩いたね。

岡部 ああ。

しずかなる昼下りにて杖に触る日の下に咲くつゆくさの花 『竹叢』
道々に摘みたる花を捨ててゆくあずき色よりピンクが好きで 『戸塚閑吟集』

由紀子 十分歩いた。十分歩いた。ほんとに歩いた…、ねえ。これ、食べるの？

岡部 いやいや。

由紀子 食べないのね。いいよ、食べなくていい。

岡部 男と女の

岡部・角宮 間には

岡部 エンヤコラ
由紀子 エンヤコラが、好きなんだよなあ。

岡部 エンヤコラ ローオ

角宮 やつぱり、この歌、随分すごいね。

由紀子 そういう力があるんだね。

岡部 ふりかえるな ローオ

角宮 この歌ときどき好きな人いるのよねえ。

由紀子 あ、そう。

角宮 私も、好き。岡部先生、これ好きと思わなかった。ああ、よかった。一緒に唄えてよかった。

由紀子 ね。こんなことないですよ。

角宮 合唱できて。

由紀子 あの、誰かが来たときにね、ちょっと歌を唄ったことがあるの。これじゃなくて、なんの歌だったかなあ。一度ありますね。人が取材に来たときに。その後、何十回人が来てもこういうことないね。角宮 いい巡り合わせ。今日、今日の時間、ね。ありがとうございます。

由紀子 ありがとうございます。ああ、楽しかった。よかった。ほんとうに、いい日だったね。

岡部 ああ。

——岡部桂一郎氏の手は、肉厚で大きく、包まれると少しひんやりとする。部屋を出て、振り返れば、窓の光に真向かい動かないがっしりとした背。そこに触れて由紀子夫人も一対の像となる。
ささやかに生きる。うちなる太さを秘めて生きる。人は誰でも老いによりしずかに失ってゆくものがある。けれども一本の細く貫く線のなかに、まっすぐに生き続ける人の、決して手放さない誇りがある。後ろ姿のその輪郭は、ぶれることはない。

▽ 2010.10.6 「構成Ⅱ高橋みずほ」

●草柳繁一氏インタビュー

一冊の歌集を携えて

——「胡麻よ、ひらけ」とうたいつつ

秋のひと日、称名寺（横浜市金沢区）の赤門に隣接するふみくら茶屋に、草柳繁一氏と和江夫人に来ていただきました。木々の葉が色づく青空の広がりに、軽やかな草柳氏の声が、響き渡るように始まりました。

草柳 米寿、米寿。八十八歳だも。もう、あんた、来年は、再来年は、九十、九十。卒寿。ははは…。

角宮 草柳さんが、横浜歌人会の代表を引き受けてくださるとき、確か、葛原繁さんが草柳さんに、あの君なつてくれって、お願いしたんじゃない？

草柳 確か、そうだった。

角宮 葛原さんは、代表をやらなくて、熊沢正一さん、杉本三木雄さん、畑和子さん。畑さんが亡くなつて、そしてとても困つて、葛原さん、ご自分の病気を知っていたから心配して、草柳さんに引き継いで、続けてくれていうふうにつながれたんだと思う。で、あのとき、陰の功労者は、葛原繁さんですよ。

草柳 そうだね。へへ、むかしだな、もう。

角宮 でも、九十までね、生きるってすごい。奥様がいらつしやつたからですよ。

草柳 おかげさまで（笑）。

角宮 お酒もたばこも止められたから、よかったんですよね。

草柳 お酒飲まないし、たばこも吸わないし、真面目なもんですよ。

角宮 健康管理。とてもとても大変ですよ。だから、お幸せ。

草柳 あたし。そうさ。えっへ…。

——小さい頃の思い出や短歌で出会った方々のお話を伺いたのですが。日本橋の浜町にいらしたとお聞きしています。

草柳 日本橋の浜町で生まれたらしいよ（大正11年1月21日生。五つか、六つ頃までいたらしいよ。小学校は荏原区っていうの…、いま品川区っていうの。大崎駅の側にね、芳水学校（芳水尋常小学校。現在の品川区立芳水小学校）っていう、地元の金持ちの人の名前が芳水（重宗芳水）なんだな、その人が建てたから「※」。そこへね、初めて小学校、そこへ上がったの。だからね、小学校は品川で入っているんだからね。生まれたのは日本橋だから、親爺は恐らくそこで商売を失敗してね、洋服屋ですけどね、荏原のほうへ移ったんじゃないかな。たぶん。もつとも震災があつたからね。

角宮 日本橋の三越に浜町から…

草柳 遊びに行ったね。

角宮 遊びに行つて、麦茶…

草柳 麦茶飲みに行つたの（笑）。ただで、甘い麦茶飲みに行つたの（笑）。覚えてるよ、それ。

角宮 甘い麦茶が。

草柳 甘いんだよ。お砂糖が入っているから。

和江 むかしはね、ちよつと、お砂糖をね。

草柳 こんな大きいやつんなかに、ちよつとやれば、すつと出るじゃない。あれね、吸んで勝手に飲めるの。玄關のところに置いてある。

角宮 ライオンのわきに。ライオンは、あとかな。

和江 ライオンは、あとですね。

草柳 入口のところにあつたの。そいで歩いてね。浜町だから歩いて行かれんの。飲んで。で、なかに入つたて面白くないんだからなあ。品物しかないんだから。麦茶飲みに行くわけだ（笑）。そいであと、ぶらぶらね、日本橋かつ、見たりなんかしてさ。一回ね。階段から川縁へ降りてね、小舟あつから、舟に乗つかつたんだよね。そうしたらね、友達、小僧だからね。みんな子供だから、紐ほどいちやつたんだよ。そしたら、舟動きだしちゃつた。そいでね。川だから、こう土がわきにあるじゃない。川の水がまあ、引き潮ときなかなあ。それで、舟から飛び降りたんだよ。小舟だからね。飛び降りて、そのわきはね、堅いとこだから。そいでね、舟はどつか行つちやつたんだよ（笑）。それは、まだ覚えてるよ。まだ、ガキだから。まだ、小学校行つてない頃だから。引き潮るときだから。それで、よく、飛び降りたと思うけど。まあ、小さい舟なんだろうな。そういうの、まだ、覚えてるね。あの舟どつかへ行つちやつたんだらうなあ（笑）。まだ、小学校へ上がんない頃だもん。

角宮 その頃の日本橋はそうだったのねえ。そして大崎に来たのね。中学校も品川区のほう。

草柳 そうそう。

角宮 でも、その頃から歌始めたんだものね。

草柳 そう。

——短歌を始められたきっかけはなんでしょう。

和江 新聞に載ったらしいですよ。投稿して、載ってと母がいつてましたけど。それから、やる気になったんじゃないですか(笑)。

草柳 とにかく、会費払って半年か、一年いたのは…、一番最初は「アララギ」かなあ…。それからね、荏原区に住んでるとき、ある日、道歩いてたらね。玄関にね。え、第一回短歌人歌会つてのがあったの。入口にこうね。木下立安って、「短歌人」の歌人だよな。表門だか、裏門。ああ、裏門だなあ。表門はこう、いつもでつかい門があつて閉まつてんの。裏門で出入りするんだな。それで裏門から。で、短歌人歌会つていうんで…。友達がいんだ、一人じゃ入らない。二人で、ちよつと入ってみようかって。二人とも歌が好きなんだよね。三輪君つていうんだけどね。入つてつて…。たら、わけのわかんない坊やが二人入ってきたつてんで、上がん、上がんなつて。中学のね三年か、四年くらいじゃないかな。新聞の歌をその友達が、盛んに読んでいたんだよ。で、僕も読むようになったんだよ。だから、そいつが先なんだけどね。で、二人で入つていつてね。ところがね、僕の歌のほうが、いくらかうまいんだなあ。その三輪君よりはね(笑)。うまいんだよ。誉められるのは、僕のほうが余計誉められてね。そいつは気に入らなくて辞めちゃったんだよ(笑)。やめたあ、とかいつて。へへ。歌はそいつのほうが先なんだよ。ラジオで松村英一とか、短歌の講習つてやつを聞いていたんだよ、彼はね。僕はラジオなんかないんだもの。子供時分、貧乏だから。ラジオもないんだもの。

角宮 その頃、ラジオは、お金持ちのものなんですか。
草柳 彼は、畳屋の倅なんで。畳屋だから、それは

お金持ちだろう、それは。そしたらこんだあ、二人でもつてね、僕の家の近所をぶらぶら歩いてたら、おいおい歌会つていうのあるよ、ちよつと見てみよかつてね。で、その人の家、お屋敷だからね、いつも門は開かないんだ。そしたら、なんかかわいらしい、半ズボンの坊やが二人入つてきて(笑)。上げられて。その頃、「短歌人」が出た創刊(昭和14年)のとき。そいでね、みんなきれいな着物きてたよ。斎藤史つていう人がいて、お嬢さんがいて、きれいな着物きて、美人で。そいでね、びっくりしちやつて。僕は端つこのほうで座つてたわけ。それで、歌出すでしょ。まあ、みんな誉めてくれるでしょ、子供の歌だから。で、いい気になつてね、行つてたね。

角宮 それで、「短歌人」にちよつと入つたの？

草柳 そう。そいでね、二宮冬鳥というお爺さんのね、歌集の原稿をね、頼まれちやつてさあ…。毎日のように、暇のとき、こういつて、缺で雑誌からご本人の歌を削つて、順番に雑誌の歌を並べて貼つてゆくわけだ。そうすつと原稿になつちやうわけでしょ。1月号、2月号つつて原稿をこう…、切つたの、その人の歌を並べて、帳面に貼つてゆくわけ。それで一冊歌集ができちやうわけ、当然ね、何百首つて。角宮 あ、二宮冬鳥さんつて、「高嶺」つていう本やつてた人。

草柳 そうそう「高嶺」。

角宮 あの人、「短歌人」にいたの。

草柳 そう「短歌人」。いや、その人はねえ、あ、木下立安つて人。

角宮 二宮冬鳥さんじゃないわよね。

草柳 うん、木下立安。その人も「短歌人」よ。それで、歌集できちやつた。一年くらい入つてたね。長続きしないんだよなあ(笑)。

角宮 会費が切れると辞めちやう。

草柳 会費が切れちやうからさ、お金ないんだから。

——宮柊二さんとの出会い、一叢会へ入られた経緯についてお聞かせください。

草柳 うん、あのね、宮柊二つていう先生とこへ。一叢会つてね、宮さんがそれやつたわけ。で、それに入れてもらつてね。初めから入つたんじゃないで、第二号目ぐらいから出たのかなあ。宮さんのところに弟子みたいに、知り合いになつて、通つてたんだよ。なんで、宮さんのところへ行くようになったんか、わかんないんだけどなあ。うむ…、宮さんの…、葛原(繁)さんつていう友達がいてね。その前だから…、ああ、郵政省にいてね、短歌講座かなんか、講演会みたいなのをやつたことがあんだな。それで、宮さんに頼んでね。そんなことから、知り合いになつてね。へんな、ほら、役所で、勤め先で、「文学部」みたいな、そういうグループがあるじゃない、そういうなかでね、宮さんに頼んでなんかやつてもらつたんだな。じゃなきゃ、あるいは葛原さんがまあ宮さんのところへ行つてるわけだから、葛原に連れられていったんかもしれないけど。

角宮 「コスモス」には、入らなかつたのよね。

草柳 入つたこたあ、入つたの。入つたの。まあ一年くらいね。一年くらいで辞めちやつたの。俺、続かないんだよなあ。不真面目でしょ(笑)。会費払えないわけじゃないんだけど、歌を続けられないんだよね。毎号。歌を出すつてことができないんだよ、うん。つくるときはつくるけれども、つくらなるときは、一年くらいでもつくらないんだもの。だからね、宮さんはきちつと毎月歌出さなきゃいかん



草柳繁一さん

でしょ、あの人は。怒るんだよね。続かないんだよね。

で、生意気だから。飲兵衛だしさあ。宮さんのこと、宮柊二つていわないで、宮とうじなんいていつてみたからね、えへへへ。悪口いたりさ、するもんだから、怒られちゃうんだよ。またね、会費も払わないだよ。飲み屋の払いのほうが急がしくて（笑）。

角宮 その頃、すごかったからね。夜な夜なね。

草柳 そう。だからね。まあ、歌もできないしね。宮さん、毎月出さないと怒る人だからね。だから、だめなんだよ。

角宮 草柳さんって自由人ね。結社なんかの縛りには…。

草柳 で、お前、（前田）夕暮のところへ行けてね。

角宮 茶饅頭もつて訪ねたの。

草柳 あ、そうだ。

角宮 その頃は、夕暮は糖尿病になったの。それなのに、茶饅頭もつていったのよ。

草柳 あそっか。

角宮 だから、毒饅頭もつてったようなもんですかね。っていったのよ。

草柳 よく知ってたんな、んなこと。

角宮 だって、私聞いているもん、そこは（笑）。

草柳 そうか、俺、忘れちゃった（笑）。

角宮 あの頃は、茶饅頭っていうから、郡山かどこかのよね。あの頃は、甘い物なかったのよね。

草柳 夕暮に挨拶に行つてこいって、いうんだ。

角宮 でも、宮さんともずっと長くお付き合いなされたものね、最後までね。宮英子さんともね。

草柳 うん。

和江 旅行もよく宮さんたちと行きましたね。子供たちを連れて。そしたら宮さんかわいがってくれてね。かわいがってくれたんですけれども、やっぱり親には、かなわないっていつてましたよ。

草柳 へへ。

角宮 英子さんは、横浜の女学校の先生をしてたでしよ。

和江 してました。うん。橋の側の学校。

角宮 英子さんに教えてもらったといった人、横浜歌人会にいましたもの。宮さんも横浜のどつかで暮らしましたよね。

草柳 川島町というところだな、名前は。何区なのかなあ。よくもう、お邪魔してお世話になったよ。ほんとに。

角宮 そういう頃に、金子一秋さんともつながったの。「コスモス」。

草柳 うん、「コスモス」。金子とは、泥の会というのをやって、そこで大体、会ったんだよね。

——泥の会のメンバーは、どのようにして集まったのでしょうか。

草柳 泥の会というのよね、宮柊二と香川進が、人選して集めたんじゃないかな。たぶんね。

角宮 そうおっしゃった、前に。若手をね。泥の会

をつくる頃、歌壇の動きのなかで、反体制みたいなあったの。若者を集めるについては。

草柳 いやあ、それはわからない、あつたんかもしれないけれどね。あまりよくわからないな、これはなあ。なんでそういうのできたんか、そういう理由もよくわからないね、ただ集められただけなんだ。

：香川氏が赫ら顔で精悍である印象と、卓子^{てぶる}の上にフラスコのような広口壺につめた透明な焼酎が二本置かれてある印象と、その座敷から裏手に夕方の暑いトタン屋根が見えていた記憶がある。

（金子一秋）※2

草柳 泥の会って、泥棒の泥ね。泥っていう名前は、誰が言い出したんかなあ（笑）。

角宮 面白い名前ね。草柳さんがつけたんじゃないの？

草柳 つけない。俺は、もっとモダンな名前つけるんだけど（笑）。泥って誰か…、山崎方代かなんかがいいだしたんじゃないのかなあ。へへ（笑）。ありや、どろつていわないで、ずるつていうんだ、ずるつて（笑）。訛るんだよいくらか。うっへへ（笑）。

「泥」発会の「白菊」、というそのおぼさんの合言葉があることと（「泥」という名前は確か二、三回あとで決まったと思う）そのおぼさんが亭主と二人で用をしながら『泥棒』の会とはなんですウ」と岡山弁で聞くのに困った記憶もある…。

（金子一秋）※2

——泥の会の発足後、雑誌が発行されるまで、ある期間がありますが、どんな活動をなさっていたの

ですか。

草柳 歌会をやっていた、年中ね。

和江 毎週ね、みなさん来てましたよね。

草柳 泥の会ができてから、十年くらいたって「泥」が出たんじゃなかったかな、その頃になって雑誌を出せるくらいの財力も出てきたんじゃないの。それまでは、金がないんだから。そんなことできない。十年くらい経つてようやく。

角宮 日本の経済が、復興して来たのよ。

草柳 そう。それから、歌も一人前になってきたんだよ、うん。初めはね、へぼだから。

角宮 グループでわいわい：

草柳 やつてるうちに、いくら成長してきたんだよ。お互いにね。泥の会つてえなあ、20年代の終わり頃にできたんだから、確か。で、会長が金子一秋つてえのがね、お前一番年が若いんだから、お前会長やれつていうんでね、あいつが会長になって。俺んとこは、事務局長でさあ。池袋だから、年中来てたんだよ、みんな。それで、僕んとかあ、郵政省でね。いろんな謄写版とか、印刷の機械とかがあるでしょ。それを使って、みんな帰ったあとで刷るの、泥の会報をね。

和江 でね、みなさん、会社の帰りやなんかは、そのまま家に来て、奥さんすみません、手拭いと石鹸貸してつていうから。うちお風呂あるんですけれども、近くにお風呂屋さんがある。そしてね、もつてゆくんですよ。また帰ってきて、お酒を飲みながらお話して。十二時過ぎですわね、いつもね。

角宮 楽しい時代ねえ。

草柳 「泥」はよかったよなあ。片山(貞美)でも、うん。角宮 ものは不足していたけど、心がよかった時代。

草柳 よかった。楽しかったね。歌ができると、あったあ、国立からあれだよ、品川まで、歌見せに来るんだから、片山がね。へっへっへ。どうだあ、どうだあつて。あつてははは。

和江 ね、片山さんなんか、しょっちゅう子供連れてね。二人連れていらつしやいましたよ。で、間違えてね、うちの子のね、靴はいてつちやつて(笑)。もう、うちのがね。私の靴がない、ないつていつてたら。片山さんの上のお嬢ちゃん、ふゆちゃんつていう方なんですけど、はいてつちやつて。それで、いいじゃないですかつなつてね。

角宮 奥様が大変ね。

和江 いやいや、大変じゃない、楽しかったです。泥の会の奥様方つてね、すごい気が合うしね。家にまで行ったり来たりね。うちも片山さんところ行つたし、片山さんご夫婦うちに何回も何回も来たりね。山崎さんとかね、金子さんとか、みんな、ねえ。内々で、お付き合いましたよねえ。どこ行つたんでしようかしらね。岡部桂一郎さんから、片山貞美さんから、金子一秋さんから全部：、奥様も同伴で、みんな写真撮つてね。

角宮 宮田信次さんも。

和江 あの方は、そのときは、参加していらつしやいませんでしたよ。

角宮 杉本三木雄さんは。

草柳 ああ、あれはたぶん来てるよ。

角宮 奥様、連れて。

草柳 それはわかんない、わかんない。片山の奥さん入っている。

和江 岡部さんの奥様、凄い元気よ。前もね。だめよ、草柳さん、こうしようね、ああしようね(笑)。

草柳 ああ、お元気だ。

和江 葛原繁さんも一緒にしたよ。奥様も。そのときは、みんな奥様方もね、お話もしてね、仲良しでね。でも、ばらばらに遠のいちゃつて。

草柳 粗方死んじやつたよなあ。困つたよなあ。

「泥」が何をして来たか。：事實はなんにもそこにのこらなかったと思う。しかしひとつ、掛けがえのないものを継続し、のこして来た、そのことを忘れることは出来ない。：それは我々の困難な生活と、その生活を背負った中での勉強とに互いに支え合つて来た友情であつたと思う。

(金子一秋)【※2】

和江 みなさん、いい方でしたね。松山のときも、金子さんでしょ、奥様と。片山さんの奥様でしょ。岡部さんでしょ。みんな来てくれたわよね。一泊でしたか、ホテルに泊まつて。

草柳 仲良かった、みんなね。山崎一郎とかね、山崎方代とかね。

和江 奥様同伴で。みんなでぎやあぎやあ騒いでね。

角宮 みんなくつろいじやうわよね(笑)。

草柳 みんな、よく遊びに来てくれたよなあ。家にも酒飲みに来るんだよ。うつつふふ。

角宮 玉城徹さんも来たの？

草柳 玉城は、あんまり来ないね。玉城は泥の会じゃないからね。

和江 うちには、遊びにいらしたわよね。

草柳 片山の友達で知り合いになったんだから。一緒になんかやつたそういうことはないね。

和江 「ちえのわクラブ」で、ラジオに出てたじゃない。あの人もよく来たわね。

草柳 深作(光貞)。

角宮 あの人、一時歌壇で派手だったでしょ。フランス帰りの。で、茅ヶ崎におうちがあつて。

草柳 あれは、金持ちなんだよな。

角宮 食いつぶしちゃったのよね。跡形もなくなつた。

和江 あ、そうなの。家に来ると、そんなこと全然ない。みんなとおなじように、きやあきやあ騒いで。

草柳 あれは、歌うまかつたよ。いい男だったよな。

和江 あの方ね、おしゃれな方だったですよ。身なりが一番。あとはみんな大体、同じようでしたけど。あの方はね、いつもきちつとして。でもそういうところ、微塵もないわよね。みんな同じよね。うち来たときは。方代さんには、びつくりしたことがあるわよね。もう、突然ね。お仕事に行っているときに。突然ね、家に来て。私はまだ一回もお会いしたことがないんですよ。で、トントントンて来て、方代ですがつて。私、知らないんですよ、短歌やつてる方だと。なんかびつくりしてねえ(笑)。

草柳 みんな、びつくりするよな。

和江 ううん。すごいびつくりしちゃつて、私すぐ電話したんです(笑)。こういう人來てるんですけど、お友達つて。

草柳 結婚する前なんか、年中家に来て泊まつてゆくんだよ。飯食いに來るんだよ、品川の家に。飯食つて帰るんだよ。ははは。

和江 びつくりしましたね、あのときは。そしてね。奥様ね、障子紙かなんかありますかっていうから。えつ、なにするのかしらと思つて。で、電話したら、出してあげなさいっていうから、そうですか。で、さらさらさらつて書いてね。

角宮 字書くの？

和江 うん。筆ありますかって。ちょっと嫌な人だなあと思つたんですけどもね。突然ね、來て。一回お会いすればわかりますけれど、初めての方ですよ。

角宮 怖い方ですよ。

和江 怖いです、はつきりいつて。

角宮 私も最初來たとき、怖かつた。

和江 奥様これ、大事にとつておいてつていうから。なんでですかつていつたら、僕が死んだら、すつごく価値がますますつてゆつてね。大事に仕舞い込んで、なくなつちやつたのね(笑)。どこへいつちやつたんだか、わからないんです。

角宮 いま、お探しになつたほうがいいんじゃないですか(笑)。

和江 大分、何種類か書いて…。

角宮 自分でそうやつて、有名にもならないうちから(笑)。

和江 書きましたよ。僕が死んだら価値が上がりますよつて。

角宮 すごいわよね、その台詞。

和江 私、なんか、ちよつと悪いけど、おかしい人かなと思つたりね。お顔見てね、はつきりいつて。それからね、何回かお会いすると、この方がいい方だわあと思つて。鎌倉にも何回もね、呼ばれて。一緒に行つたり、方代さんの家にも行つたり。でね、方代さんの住んでるね、お庭に建ててくださった、中華屋さんが…

草柳 小屋な。

和江 來てくれ來てくれつてゆつて。行つたりね。行つたり來たり、結構ね、しましたもの。

角宮 お庭に小屋を建ててくれるほど、やつぱし愛されるなにかがあるのね。

草柳 愛されるんだよ。

和江 人はいいんですよ。初めて見るとびつくりしますけどね。

草柳 人がいいんだよ、好かれるんだよな。いつてたよ、方代が。草ちゃんね、ときどきね、お土産もつてね、女の人が訪ねて來てくれるんだよつて(笑)。

角宮 たつくさん訪ねて行つてた、女の人が。

草柳 嬉しそうな顔して。うっへへへ。そうか、そりゃいいなつて。うん、いいんだつて。ははは。

和江 初めて見ると、びつくりしますよ。初めて。

角宮 でも、女の人、なんでぞろぞろゆくのかと思つた。

草柳 中年のね、おばさんがさ、お土産もつて。お饅頭なんかもつて。そうすつと、あいつあ、色紙みたいなのにね、でね、うまいのかまずいのかわからないような字で書いて。喜んでもつてかえる(笑)。

和江 素直なんですよ。そんなこというと申し訳ないけど。心がきれいで、素直なの。お話してても、だんだんだんだんそうやつて…

角宮 そうやつて、だんだん増えていつたんだ、ファンが。

和江 そうみたいよ。ね、いい人よね、方代さん。初めて見ると、びつくりするけど。何回かお会いすると、いい人よね。

草柳 うん。すごく人間はいいんだよ、あれ。すつごく、いいよ。素直で。もう、いい男だよ。ありや悪げないよ。

和江 何回か、お会いすると、人柄はわかりますけれど。初めてのときは、びつくりしますよ。

草柳 初めてのときはなあ。

和江 なんか聞いてればわかる、なんにもいわないですよ。

草柳 しやべる言葉もね、方言が混じって。なにいつてるか、わかんないときがあるからなあ。

和江 あんまりいろんなこと、いわないんですよ。私に、友達のこと。一緒に連れてつてくれるんですよ。それでやつと会々と、こういう方だなんてわかるんですけどもね。

草柳 俺の独身の頃から、もう家へ遊びに来てたんだから。泊まってくの。お袋がね、ご飯食べなつつてさ。たいしたおかずはないけど。食べてゆくわけだよ。泊まってるね。

角宮 そういうところあったから、方代さんも幸せよね。方代賞っていうの、みんな上げてた。ご褒美に、万年筆配ってみたいじゃない。

草柳 勝手に名前つけてな(笑)。その場に来て、上げるんだよな。それでももらったことになっちゃうんだよな。変わってんだよな、こいつあな。

角宮 そうゆうことやっても、天真爛漫で認められる人なんだ。

草柳さんのもらった方代賞は、賞状(伊東屋の原稿用紙B4に、方代さんの文案で岡部桂一郎さんの文字)、金一封(一万円)の熨斗袋。副賞にパイロットの万年筆(金文字で「方代賞 草柳繁一」)。この賞について、『山崎方代全歌集』(不識



草柳和江さん

書院、一九九五年)の年譜1978年に記載があるが、椎名恒治等とあり、同時受賞の草柳さんの名前は、なぜか省略されている。賞状と熨斗袋は、鎌倉飯店の故根岸兎雄氏宅にある。

草柳 うん、そう。あの狭い家に来て泊まって、酒飲んで、飯食って。

角宮 いい時代でした。

草柳 いい時代といふかなんちゅうか…。それで一緒に表出て、俺は勤め行つてね、方代帰つてゆくわけ。

和江 みなさんで泊まって、そこから会社行ったり。

草柳 遅刻。勤め先は遅刻。

和江 おうち帰らないんですかって…。家からまた行つてね。そして、また泥の会やつたりね。でも若いから、大変じゃありませんでした。楽しかったです。

草柳 楽しかったよ。変わったやつばかりだから、面白いんだよ。岡部でしょ、これ変わってんだよな。

へへ。山崎一郎、これはまた面白いんだよ。『創作』にいる。僕より年上ですよ。しゃべるとき、こんなことしながら「指揮者のように腕を目の前に立てて」、話をするんだよ。面白いね。経団連だよ、勤め先は。経済団体連合会。

角宮 偉いんだ。

草柳 偉いんだよ。書記だけだね。役員じゃないんだけど、そこへ勤めていたの。丸の内だよ。

…今後は全部互に呼び捨てにしろ、…それが以後「泥」の慣わしになっていった。生活も経験もそれまで戦前・戦後の全部の経歴も結社関係も違つた者同士がそのときから以後、山崎、片山、ある

いは名前だけ取つて方代^{ほうだい}という工合に呼捨てになつた。その次に、「酒の入つた場合の議論は一切ダメだ。議論のある日は全部済んでから酒にしよう」そういうのはつきりした議論を出したのも岡部である。
(金子一秋)「※2」

和江 家族同士で、お付き合ひしていたわよね。

草柳 だいたい、家族同士のお付き合ひになつちゃうんだよ。

和江 そうね。

草柳 うちのお袋っていうのがね。人が良くつていうか、お客を大事にするタイプで、下町育ちだから。それだから、喜ぶんだよ、客が来ると。泊まつていきなさい、泊まつていきなさいつてね。大事にするから。

角宮 いまは家の造作から違つてきたでしょ。むかしは開けつぽろげだし、畳だし。すぐ続きのお部屋がこうして見えるし。見れば…、一番奥まで見えちゃうし。

草柳 そうなんだよ。

角宮 やつぱし、心も違ってくるよね。お付き合ひも違ってくるし。関係が違つてきちゃうねえ。すべてゆとりがあるわ。いまは一個一個固めるように鍵かけちやつて。

草柳 俺なんかの家はね、あれだよ。結婚する前にいたときにはね。なんていうの四軒長屋が、四棟並んで、向かい側にね。だから、ハモニカ長屋つていわれていたんだ。ハモニカのように並んでいて。俺はね、ドレミのミくらいところに(笑)。で、入口のほうにいた。三軒目。そいでね、そこへみんな来るわけ。そうすると、歌唄ったり、酒飲むわけでしょ。みんな、聞こえるわけだよ。あ、また、繁ち

やんやつてるよ、なんつつて(笑)。

角宮 そうというのが、笑って見過ごされるような時代だったのね。

草柳 そうだよ。みんなね。俺の前は、おまわりさんだからね。おまわりが住んでるんだから。なんかあると出てくるわけ、おまわりさんがね。わざわざ、制服着てでてくる。うっははは。だから安全なんだ(笑)。泥棒も入らない。そこでもつてき、自分のつくった歌どうどうとね。これやこの…、とかいつてね、声出して読むでしょ。五、六軒向こうまでさ。あら、繁ちゃんまたやつてるよつて。うっへへ…はは。有名だったんだよ(笑)。

——歌ができれば、声に出して読まれるほうですか。歌集『胡麻よ、ひらけ』の扉の裏に、「ゆつくり、できれば声にだし、思い入れよろしく、読んでください。著者」と書かれていますね。

草柳 あははは。読まないよね、歌の良さわかんないんだよ。ああ、そうか。ばかだね、声出して読めつて、書いてあんの。あんまりいいいな。そんなこと書くの。あははは。俺、読んでつから、声出して全部じゃないよ、いい歌ね、好きな歌を。ああ、いい歌だなと思いがね、やるわけだから。そうするとね、暗記しちゃうわけでしょ。

和江 でも、テープにとつて、大体、聞いてますよね、いつでもね。

草柳 そうだよ。自分の歌聞いているんだよ。ああ、いい歌だなあつて(笑)。歌つて、だつて歌なんだから。徹底しないとね。歌つて声に出して、聞くもんだから…。

角宮 そうなの。だつてむかしは耳から、心へ入っ

ていったわけでしょ。

草柳 うん。いまは目から入るからね。

角宮 それから、今度は携帯短歌でしょ。どうなっちゃうのかなつて。

草柳 俺の歌は、耳から入る歌なんだ。

角宮 ああ、そういえば草柳さん、いい耳してますね。

和江 みなさんにいわれるんですけれど、どうしてですか。

角宮 福耳ですよ。あの「ひらけ、胡麻」の呪文と歌集名は、なにか関係があるの。

草柳 「ひらけ、胡麻」をひっくり返しただけなんだよな。僕の歌「胡麻よひらけ胡麻よひらけといふ声の低き呪言の今宵きこゆる」つていう歌があるんだよ。ひらけ胡麻じゃごろが悪いから、ひらけ胡麻ひらけ胡麻じゃねえ。歌のリズムがあんまりよくないんだよ。だから、胡麻よひらけ胡麻よひらけつていう…。

——草柳さんのリズムをお聞きしたいので、『胡麻よ、ひらけ』のこの辺りの二首、朗読をお願いします。

草柳 「妻と子が 夜の厨にうたふ声 織りなす声の 聞こえてゐたり」。いい歌だね。「部屋歩く 蟋蟀ひとつ我は逐ひ わが背後より妻と幼子」。蟋蟀歩いているのか、うちには。へっへ(笑)。

角宮 ゆとりのある歌だね。

草柳 ええつ。いやあ、ばかな歌だよ。「茶碗より煙のぼりて現るる 霧隠才蔵・猿飛佐助」だつて。

角宮 それ、草柳さんの芝居っ気、たつぷり。

和江 これは二番目の子が生まれたときの歌ではな

いかと…。下の子はものすごく活発だね。一番お気に入りなの。気が合うらしんです(笑)。

角宮 草柳さん、落語とか歌舞伎がお好きでしょ。

和江 あ、歌舞伎は好きですね。

草柳 芝居は好きだからね。

和江 子供の小さい頃、よく行きました。

草柳 若い頃は、家でもつてやつたんだよ、年中(笑)。狭い家なのにな。六方踏むつて、よくいうじゃん。あれを台所からね、玄関まで。行くぞーつて、タタタつて。玄関まで出てつて。それで、行つてきまあすつて(笑)。朝出がけにね。じゃ行つてくるよつて、ではではつてね。玄関飛び出しちゃうんだよ。家が狭いから。はっははは…。で、みんな、お袋喜んで笑つてんだよ(笑)。しばらくさあ、玄関の向こうへ出ないと、六方踏めないんだよ。あつはは(笑)。そうすつと、また繁ちゃん、また始まったよつて、近所で見えたんだよ。こうやつて、おばさんがまたやつてるよ。あつははは…。ほんと、芝居好きだったなあ。金ないからさ、三等席でいつも、こうやつて見てんの。

角宮 浪人の落し差しつていう歌あるもんね。あれは、ご自分がそうなった気になつて、歩くんではよ。堀川のところ(笑)。

草柳 ソフトさ、かぶつてたつてさ、出がけにこうもつてね。ではつて。ははははあ、ははは…。芝居気たつぷりなんだよ、ほんと。俺の歌なんかそうだよ、そうとう芝居気だよ(笑)。いい加減なもんだよ。

落し差し虚無な顔の浪人がいでくる時代小説が好きだ
「短歌現代」(平成19年6月号)

海老茶のソフト

幸福を祈りますなどとこのわれが海老茶のソフト

傾けて言ふ

『胡麻よ、ひらけ』

戒名

草柳繁一享年二十六情火消滅嘆息信士

『胡麻よ、ひらけ』

草柳 後光の射するような歌がつくりたいね。

角宮 できる。

和江 できるわよ。あなたさ、神社行つたときに神主さんにいわれたじゃない。後光が射してるって。

草柳 うっへへへ。

角宮 この神社？

和江 うん。どこへ行つたんだっけ。ずっと見て、あ、あなたですよって。なんですかっていったらね。

こつちから見たらね、すっごい、金びかにこうね、後ろから、後光が射してるんですって。それで、ずうっと、こつちからよおつく見たら、あ、あなたです。

草柳 へへへ。

和江 びっくりしちゃった。知らなかった。全然知らない神主さんに。どこの神社だったかしら。

草柳 だめだ、もうすぐ死んじゃうよ。

和江 すぐほらね…、そういうことをね。

草柳 すぐ死ぬさもうすぐ死ぬさと思いつつて、上の句はできてるんだよ。下の句がなかなかできないんだよ(笑)。いえば勝手に死ぬといいたり。あははは。

和江 それはよくない。

草柳 上の句まではできてる(笑)。そのうち雑誌に発表するよ、注文が来たら。はっははは…。

角宮 歌集、九十代で出せたら、すてき。

草柳 ああ。もう一冊ぐらい、歌集出したいと思うけど。とつくに原稿あるんだけど。第二歌集の原稿もできている。第三歌集の原稿だってできている。

原稿だけはね。毎日これ見ていると、だんだん歌の数減っていくんだよ(笑)。これだめとかいつて。

角宮 片山さんに見せたのが、まずかったのよ。片山さんに気力削がれたの。

草柳 片山のやつ、ほんと、気楽にバツつけて。十首あると十首全部、バツつけるんだから(笑)。上に大きなバツ。十首、十首全部よ。題はバツつけないだけ(笑)。題だけ残ってっけど、あとはバツ。最後にさ、うまいよとか、いい歌集だとか、書いてはいるんだよ(笑)。バツがいっぱいあるんだ。

角宮 私には、片山さんは、草柳さんを天才だからなつていつたんだから。

草柳 いったないよ。

角宮 天才型ですよ。ときどき、気まぐれ的なつちやうのよね(笑)。

草柳 気まぐれ。そうだな、それはそうだね。

角宮 ときどき、止めちやつたりするわけでしょ。

草柳 止めちやう。続かないんだよな。

角宮 自由人なんだ。束縛が嫌い。

和江 そうかもしれませんね。

草柳 片山の歌と、俺の歌とは全然違うね。

角宮 草柳さんが、片山の歌をちよつとなにかがわかれれば面白いよといわれて、それから、少し親しみを感じるようになったの。

草柳 普通に読んだんじゃあ、面白くないよなあ、あれ。よく読まないよね。難しいしね。言葉づかいが。言葉の面白さだな、あれ。

和江 私にもね、草柳は名人だつて。

角宮 あつ、やつぱり。

和江 俺なんて全然かなわないって。そうゆつたら。とんでもない、片山さんのほうがずっと上だよって(笑)。

角宮 天才は天才ですよ、うん。

和江 片山さんもいい人でしたよ。

草柳 片山はいい男だよ。俺がけなしてやると、もうしよげ込んだりやつてね。だめ、これ。なんていうとさ。うっはははは。しよげちやつてさ。参つたなとかいつてさあ。頭掻きながら帰ってゆく(笑)。向こうだつてやるんだからなあ。お互い様なんだから。

角宮 草柳さんもやつてるのね。

草柳 そうだよ。お互いなんだから。遠慮がなしなんだから、お互いに。誉めるときは誉めるよ、もちろん。いいなあとかいつて。だけど、誉めない方が多いね。お互いに、そういうもんだよ。

角宮 片山さんなんかは、辛口の感じがした。

草柳 あれは、辛口だよ。

角宮 横浜歌人会で片山さん、呼んだときも…。で、片山さんもむきになつて怒る人ね。

草柳 そうそう。怒りんぼなんだよ。それで、しよげ込んだよ。けなされたりするとね。それでもね、そのときは、黙つてんだよ、やつぱり片山もね。けなされてもね。帰り、終わつて二人で帰るときね。俺だめだつて。うっはははは。しよげてんだよ。面白い男だよ。でもね、うんなことないよ、お前。あれはたいした批評じゃないよ。気にすんな、なんちゅうと、そうかつ、ていつてね。正直だから、すぐ喜ぶの。すぐ直つちやうの(笑)。

——郵政省や全日空では、どのようなお仕事をなさつていらしたのですか。思い出や出来事などをお聞きしたいのですが。

草柳 郵政省を四十二歳の厄年に辞めて、全日空に



草柳繁一さん

入ったんだな。全日空から来てくれっていわれてね。ほら、郵便積んでるんでしょ、飛行機。僕は、郵政省で郵便関係の、郵便、保険、貯金ってえのがあんだけれど、僕は郵便の仕事をやったから、郵便の主に輸送に関する仕事をやってたわけで。郵政省郵務局っていう、本省で。それで広島から大阪に転勤してた頃かな。大阪かな。広島から大阪に転勤になって、大阪の輸送課長やっていると、全日空の重役が来てね、郵便の仕事をする人がいなくなっちゃった、で、来てくれて。四十二歳かな。厄年に転勤したんだよ。うっふふふ…。

角宮 全日空のお勤めでは、短歌会なんて開かなかったの。

草柳 やらなかった。勤め先では全然、歌の話なんかしないもの、俺（笑）。

角宮 全日空のお仕事楽しかったでしょ。

草柳 楽しくもないけれど。まあ、辛くもないよな。

仕事はよく、俺が一番知っているわけだから。

角宮 機内で、豚が逃げちゃったんでしょ。

草柳 ああ、あははは…。豚の荷物なんだよ。檻に

入ってね。その檻を誰かが開けたんだよ（笑）。逃げちゃったんだよ。

和江 飛行機の下、貨物の…。

角宮 飛んでる飛行機のなかで追いかけていたの？

草柳 そうだよ（笑）。

角宮 猫も逃げたんでしょ。

草柳 えっ、忘れたよ。へっへ…。

角宮 それも高級な猫だったの。飼い主の家まで訪ねていつて…。

草柳 そういうこと年中あんの。航空貨物っていうのは、生き物もちゃんとね、運ぶんだから。航空貨物は、豚でも犬でもね。もちろん、そういうの檻に入って、誰かいたずらすりや、逃げちゃうんだよね。ま、ちゃんと鍵はかかっているはずなんだけどね。と、謝りに行くんだよ、うっへへ…。で、いろんなもの壊したりね、壊れて…、うん。

角宮 沖縄のほうの、ホテルのお仕事もなさったんでしょ。

草柳 あ、総支配人だな。まず初めに、久米島へ行ったんだよ。久米島から今度、那覇のほうに変わ

って、それから、どこへ行ったんだあ…。

角宮 四国にいたこともあるんでしょ。

草柳 松山。一年そこにおいて、つぎは海を渡って、広島郵政局。また一年経ったら、大阪郵政局。それで、あまり激しく転勤するから、折良く全日空が郵便の仕事する人いなくなっちゃったからって、いいよって、辞めちゃったんだよ。それで、全日空で関連事業室長というのやったね。航空以外の、いろんな関連の仕事ね、展開していくって。それで、お客さん泊まる場所が必要だから、ホテルをつつんで、全日空ホテルをつくったの。

和江 レストランもね。

草柳 ファミリーレストラン、アニーって。

角宮 ファミリーレストラン、随分早いね。

草柳 流行の頃だよな。

角宮 面白かったでしょ。

草柳 面白ittyちゃ、面白けど。だけど、儲からないの。あん、なあへっへっへ…。試食が面白いね（笑）。

角宮 よく空飛び回っていたんだね。

草柳 そうだよ。飛び回ってたんだ。北海道へ出張したって、あんたあ、日帰りだよ。千歳空港へ行って、二時間ぐらい会議やって、そいでもってぱあつと帰ってくるんだから。で、日当千円くらい、もらって。うっふふふ（笑）。

春

東京は晴れ札幌は俄か雨水戸高曇り春のひと日や
『胡麻よ、ひらけ』

——草柳さんを支えてこられた奥様との馴れ初めをお聞きたいのですが。和江さんは、東宝のニュー

フェースでいらしたとか。
和江　なんで、そういう話が…。

角宮　私にはね、結構ね。

和江　いつてるの（笑）。

角宮　とにかく、頭が上がらないんでしょ。奥様に。

草柳　頭。上がんないよお（笑）。だって、人前だけだよ、えばってんのあ。家に帰ったらこうだよ（笑）。

和江　そんな、嘘ばっかり。

草柳　うっへへ…。

角宮　恋愛結婚。

草柳　恋愛ですよ。

角宮　追いかけて、追いかけてでしょ。

草柳　ああ、そう。

角宮　随分、遠くまで歩いて追いかけていつてたんでしょ。

草柳　亀戸だから。こっちは品川だから、遠いんだよ。

角宮　そこ歩いたの。

草柳　歩くわけないだろう。へっへっへ…（笑）。

和江　でもね、お役所からね、歩いてよく…。母がね、靴の減りが早くて早くてって（笑）。一ヶ月は、絶対もたないんですって。二週間ぐらいで減っちゃうって。随分、大変でしたねっていわれました（笑）。

角宮　好きになっちゃったのね。

草柳　同じところで、勤めてんだから。

角宮　ええっ。

草柳　職場結婚だよ。

和江　私ねえ。半年くらいで、辞めたんです。入ってすぐ、もう。

草柳　入ったけど、すぐ辞めたの。でも、いたところに入ってきたわけ。

角宮　そのとき、ばあっと、なったのね。

草柳　ならないよ。ばあっと、来たんだよ（笑）。
和江　うそ（笑）。

角宮　インスピレーションがあつたんでしょ。

草柳　いやいや、そんなことはないよ。だんだんとですよ。お前、郵政省に何年くらい勤めてたの。

和江　馴れて半年ぐらいか、ちよっと…。

草柳　ちようど年頃だったんだよ。

角宮　他に、女性はいっぱいいたんでしょ。

草柳　年配の人ばかりだから。

角宮　目立ったんだ。目立つでしょうね。

草柳　そう。若いのはいなかったの。よかったよ。

角宮　それで追いかけたわけね。

草柳　そう、亀戸だからね。僕は品川ですからね、遠いんだよね。

角宮　帰りが大変ね。

草柳　大変だよ。親爺がおつかない人なの。この人のお父さん。

角宮　草柳さんが、怖かった。

草柳　なあ。これが怖がつていたの。

和江　うん。すっごい、厳しい人でね。嫌いなものわざとね、食べさせるんですよ。我慢して食べちゃってね。

草柳　てっへへへ…。

和江　そういうだけの忍耐がない人には上げない…（笑）。

草柳　喧しい親爺だったよ。

和江　一番思ひ出すのはね。ドジョウをね、普通はこう裂いてね、引くでしょ。丸ごと入れるんです。

角宮　でも、柳川でしょ。

和江　柳川でもね、丸ごと。で、牛蒡を笹掻きで入るんですよ。それを食べさすんです。

草柳　開いているやつは食べんだけどさあ。

角宮　本当に好きな人、それを食べるっていうんだけどね。

和江　嫌いなものね、本当は。

草柳　嫌いなんだよ。

和江　気持ち悪…（笑）。

角宮　浅草のあそのドジョウはみな、ごろごろよ。

和江　あそこに、食べに行きますけどね。あれからね。

角宮　結婚してから、お好きになった（笑）。

草柳　結婚してからはあまりドジョウ喰わないなあ。煮ないもんね。あんまり好きじゃないから、食べには行かないよ、ドジョウは。ウナギは食いに行けど（笑）。

和江　あとから、結婚してから何回もいわれました。

角宮　食べたんだ。

草柳　食べたんだよお。ここで喰わなかったら、男がすたると思って、へっへっへっ（笑）。

和江　私たちはあんまり食べてないですけどもね。度胸だめしに（笑）。

角宮　むかしは、各家庭でそういうのつくったのかしらね。

和江　あ、父はね、神田のほうでね、お蕎麦屋をやってたんです。私は神田の生まれなんです。小さいときですから、あまりよくわからないんですよ。

草柳　鉄屋、銅鉄商。おつかない商売してんだよ。おつかない親爺。俺、全然平気だけどね（笑）。お母さんも喧しんだよな、結構な。

和江　厳しいです。

草柳　下町の、江戸っ子だからな。ちゃきちゃきのこっちだって日本橋生まれなんだから、江戸っ子な人だけでも（笑）。

和江　でも、品川のお母さん、長男ですからね。す

ごく大事に育てたらしんですよ。大事、大事でね。だから家へ来ると、それが出るんで、父に怒られるんです。いつも、厳しくするんですよ。品川のお母さんは、優しいわよね。

角宮 お母様は、ご長命でいらしたわよね。

草柳 九十九。もう一年生きると、百万円もらえたんだよ（笑）。品川区で。いまはどうか知らないよ。その頃はね、百万円くれたんだよ、区役所が。九十九で、意地悪なんだよ。そうはいかないよってなわけであ。九十九で逝っちゃった（笑）。知ってるんだからね、もらえるってことは。ちよつと、がんばってくればいいのにさ。もうちよつとちゆうところで死んじゃったんだよ。親爺は、七十七で死んだんだなあ。

角宮 これもむかしなら、長命の家系なのかもしれない。

草柳 叔父さんもおつかねえんだよ。目つき悪くて（笑）。

和江 叔父がね、浅草でね、刑事やっていたから。浅草一面全部いろいろ、こう。

草柳 浅草署の刑事やってたから。ただで入れるの。

和江 それは、むかしね。いまは通りませんよ（笑）。

草柳 叔父さんと一緒に行くとね、入れてくれるんだよ。

和江 二人で入れてもらったことあったじゃないですか。

草柳 一回あったよ。そういうこと。

角宮 奥様のほう、みんなおつかないんだ。

和江 そうなのよ。うち、みんな怖い人ばかり（笑）。

角宮 浅草ですと、取り締まるの大変でしょうね。

和江 ですから、叔父さんの名前いうとね、僕連れていってあげるよっていいってね、連れていってくれ

るの。

角宮 で、入れちゃうの。

和江 ただで入れちゃうの。梅園の本店は、ときによつて、ずつと並ぶときもあるんですよ。

草柳 だからいつも、ただで入れんだよ。叔父さんの顔で入れちゃう。

角宮 梅園まで。

和江 そうなんです。古いだけでね。みなさん知ってるらしいの。結構大きな捕り物でも、叔父さんが行くと、まとまっちゃうらしいの。

角宮 ああそう。

草柳 刑事だからなあ、顔きくよなあ。

和江 なんか、古く、有名だったらしんですよ。で、亡くなったときも、警察の有名な人が、ずつと道路全部封鎖して来てくださったんですって、いってましたよ。叔母さんが。最近浅草好きよね。お寺行くようになってから帰りが楽しみな…。

草柳 うん。

和江 浅草で一回ね、塩田良平先生に会って、びっくりしたわね。

草柳 ああ。国文学の先生。国文学者。あの先生に習ったんだよ。むかし、若い頃。いい声なんだよ。朗読するの、うまいのすごく。うん。小説なんかやったら、「たけくらべ」とか、「にぎりえ」とか、あの辺のあれを読んでもくれるの。いい声だよ。

和江 向こうから、草柳君っていうから、誰かしらつと思つて、ご夫妻でね。

草柳 浅草でね、お正月にばったり。

——いまままでのご経験のなかで、一番心に残る風景はなんでしょうか。

草柳 風景いっぱいあるね。大体は、兵隊のこと思

い出すね。戦争行つて、三年間兵隊行つてね。戦車兵だから、俺。習志野に二年いて、東京に一年いて。東部第九部隊つてね、戦車兵だよ。戦車の操縦士。

角宮 近衛兵でしょ。

草柳 初めはね、東部第九部隊で近衛じゃないんだけれど。東部第四部隊っていうのが、近衛ね。

角宮 そこへ引き抜かれたんだ。優秀だから。近衛

ってなかなか入れなかったって聞いている。

草柳 いやいや、操縦がうまかつたんだよ。

角宮 それとね、容姿端麗という、容姿もよくないと、いけないんだって。

草柳 そうか、じゃ、身元調査したんだなあ。でも貧乏人の倅だから、身元がいい訳じゃないんだけど。

角宮 頭がよかつたんですよ。

草柳 えつ、いや、どうかな、そんなことあない。

角宮 頭はいいですよ。

草柳 まあ、そういうわれると、そういう気もするけど。へっへへ（笑）。

飛行機が

飛行機が空に浮かびて飛べる日は眼とち眼ひらき淋しくてならぬ 『胡麻よ、ひらけ』

草柳 近衛の戦車隊つて、空襲になるとね、部隊からね、市ヶ谷にあったんだ。乾門から宮城に入つてゆくよ。宮城に入つて、それから、むかしはよく疎開つてやつたでしょ。疎開（建物疎開）、建物よく壊したでしょ。宮城のなかのね、りっぱな講堂があるの。その柱にみんな半分くらい、鋸で切つてね、戦車でもつてね、戦車四台も五台も、柱に結え付けて、それつつて、ぶつと引つ張つて、ダーンと落

としたのよ。講堂を。

角宮 壊しちゃったの？

草柳 ううん。壊しちゃったの。よく建物を壊したでしょ。疎開つつつて。空襲に、目立つでしょ。

角宮 宮城のなかは、撃たないってことになってたでしょ。

草柳 ええつ。

角宮 アメリカは、爆撃しないってことになってたでしょ。

草柳 そんなことはわかんないよ。聞いていないから。

角宮 あ、こちらはね、聞いてないから。

草柳 うん。だから、そういうことがないように、建物が見えないように、大講堂みたいな壊しちゃうの。こんな大きな柱を半分くらいみんな傷入れてね、それに結びつけて、戦車でもって、へえいと旗上げると、ダダダと動いて、いっぺんにダーンと落としちゃう。それやらされた。俺、操縦士だから。

和江 新兵の人があれすると、上の人にその人を撲てつていわれるらしいですけど、スリッパかなにかで。俺、かわいそうで、かわいそうで、撲てなくて、ちよつとやると、もつと強く撲てつて、今度上の人に怒られちゃたそうです。

草柳 天皇陛下御出ましになって。天皇陛下、ご苦労さんとかいいながら、ふふふ…。一回だけね。あとは、自分の兵舎が焼けちゃつてんだから、空襲で。市ヶ谷見附のところにあつたんだから。穴掘つて見えないようにして、下に十五、六人ね、寝られるような穴つくつて、そこに寝てた。半年ぐらい寝てたかなあ。

角宮 習志野のほうの皇軍やなんか大変だったんですよ。

草柳 そう、習志野は、東部第九部隊。

角宮 鉄砲担いで歩く、皇軍なんかしたんですよ。

草柳 したよ、したよ。

角宮 そしたら、誰かが、青蛙を食べちゃつたんですよ。

和江 えつ。

草柳 おお、いたいた。

和江 え…。

角宮 飛んでたら。

和江 え、そうですか。

角宮 つまんで、ぽつと。

和江 えつ。

草柳 そういた、同期の兵隊。

角宮 お百姓かな。

和江 え、聞いたことない。そうですか。

草柳 青蛙のこんな、小さい蛙いるじゃない。

角宮 雨蛙。空豆くらいの青蛙。栄養のために…。

草柳 歩きながら、ぽつと掴まえて、ぽつと口に入っちゃうの（笑）。それから、口見ても出てこないからね。飲んじゃつたんだろうなあ（笑）。

角宮 お腹空いてたの？

和江 あなたもやつたの？

草柳 空いてないよ。ご飯なんか、こんなに山盛り一杯くれたんだから

和江 おかわり自由なんですつて。

草柳 習慣なんだよ。それ。食べ慣れてんだよな、蛙を。

角宮 すごいね、それね。

草柳 ううん。摘まんで、わかんないうちに出したかどうかわかんないよ。いちいちそんなもの見てないからね。でも、こうやつたのは見てた。そのあとどうしたかは、わかんないから。そういうのいたな。

あれはびつくりしたなあ、ちよつと。

角宮 習慣だね、きつと。

草柳 習慣だな。若い、子供んときのね。お腹空いてたわけじゃないんだよ。そりや、山盛りで食べてんだから。

角宮 苦しい人は、ご飯食べたために行く人もいたそうですよね。兵隊にゆくのがいやがらないで、ご飯食べられるから。

草柳 僕は、あんまり食べられないもんね。いつも大盛りだよ。

角宮 軍隊のなかには。羊羹もあつたしね。

草柳 あつたよ。だから、食べるもんあんまり苦労しなかったね。

角宮 内地はね、苦労しない…。戦車隊はかっこいいよね。

草柳 かっこいいって、あんた、怖かったよ。こんなとつからさ、このぐらいの崖からダーンと降りるのよ。まつすぐ。半分さ、出てるでしょ。半分、重みがかかるとして。そのまゝ、静かにぶつといて、すうつと降りるわけだよ。崖だからね。ある程度、傾斜になつていただけだけど。見ると直角になつて見えるけど、ある程度…。そのバーンと降りて、すうつと動くの。そこで、エンジン止まつちやうと、怒られるんだよ。止めないように、こう動かなきゃだめなんだよ。

角宮 そこに、運転の技があるのね。

草柳 そうそう。要するに、クラッチ踏めば止まないわけだから、そこでうまく押してね。それから、動くわけよ。

昔覚えし戦車の操縦感覚が手足の先に未だに残る

「はな」第一四四号（平成22年4月）

角宮 敗戦になって、その戦車でもって、ずっと帰ったわけじゃないよね。

草柳 帰ったよ。

角宮 ほら、戦車でもって品川まで帰ったんだから、運転して。考えられる(笑)。

草柳 牛込から、市ヶ谷見附からね、一人で戦車こうやってね。ちよつと試運転行ってくるってね。エンジン直したから、直してもらってね。試運転でちよつと表へ出てくるからってね、ひとりで。そしてもう、戦争終わっているあとだから、もって帰るものをね、いろんなものあるじゃないの、こう鞆とかなんとかいろんなもの、軍隊の。ああいうの積んでね。戦車で、市ヶ谷見附から、ずっと五反田通ってね。それで荷物置いて、もうすぐ帰ってくるからなっているながら、また戻ってきたの。

角宮 戦車で、おうちに帰ったわけね。考えられる(笑)。

草柳 試運転に行くんだから。ある程度ね、走んないとわかんないでしょ。だからエンジン直したから、ちよつと試運転。

角宮 いい言葉ね。

草柳 それで除隊の、もう戦争終わってるんだから、怒るやついいんだよ。それでちよつと荷物を置いてね。それからまた、五反田からこう、市ヶ谷見附まで、ダダダダ…。

角宮 おうちの方々、そののハモニカ長屋ですか、その人々びつくりしましたでしょ(笑)。

草柳 びつくりしたでしょうね。

角宮 だってね。戦車で凱旋なんてね。

草柳 あのね、家に入る前に、ドブみたいなあれが、通りがあるんだよね。通りのわきに、そのくらいのドブがあるの、そこに石が渡って、で、そこを渡ん

なきやいけないの。で、もしね、重さでもって、そこがおっこつたら困っちゃうからね。そこに置いて。家までね、行って。荷物置いて。またね、とかいって、うつへへ…。

角宮 だけど、びつくりしたでしょう。その頃、焼け野原。

草柳 焼けてないんだよ。俺んところだけ、焼けなかったんだよ。周りが全部原っぱみたいになつたの。うちだけ、長屋が残ってるの。貧乏人のために、残したんだな。

角宮 すごいですねえ。

草柳 それでとにかくね。家で、お茶一杯飲んでね(笑)。それで帰ってきたの。俺、うまかったんだ。戦車がなあ。早いんだ。俺なんか、も、ばあつと。

角宮 敗戦後ですもんね。だけど、敗戦からできたのかな。

草柳 敗戦後だからできたんだよ。止めるやついいんだから。

角宮 上官もなにもがらつと変わっちゃうんだものね。

草柳 変わっちゃうんだから、もう。

角宮 怒ったら怒り返されちゃうよね、きつと。

草柳 そうそう。だから怒らなくなっちゃう。怒れないんだよね。それだから、もう自由なんだよな。

角宮 そんなにぱつと変わっちゃうのね。

草柳 えっ。そんなに変わりはしないよ。上下関係っていうのはもちろんね、あるけれど。あるけれど、戦車をどういうふうに使うとか、そんなことはもうなくなっちゃうわけだから。

角宮 考えている暇もないほどショックなのかな、敗戦で。

草柳 そうそう。

角宮 テレビの画面でよく見るけど、敗戦後の宮城の前の、あそこで切腹した人いるわけ。若い少年がこんなになつて…

草柳 申し訳ないってね。

角宮 あれはやつぱし、ああいうのが…。

和江 ありました。宮城の前で自殺している人いましたよ。で、空襲で盛んに東京やられていたときに、死体が山になったところ、私、女学校の一年生かしら、そこを跨いだりなんかしながら、ずっと、歩いてましたもの。自殺したところなんかをね…。

角宮 見たの？

和江 しているところじゃなくて、すでに亡くなつてるところをね。そこずっと死体の山ですから。そこ歩いていかなくちや…、空襲で盛んに東京やられているときに。終戦のときは、母のほうに疎開してました。

角宮 亀戸は全焼でしょ。

和江 全焼です。全焼です。おまわりさんがスコップでね。死体をね、こうやって、トラックにみなこつたって。でももうなんか、初めはなんか、変ななつたけど、もう慣れちゃった、慣れちゃいますよ。家族全部で並んでね、亡くなっている人を…。そのまんまいましたし、いろんな、いろんな死に様を見えています。それで、すぐ私の母のほうのね、田舎に疎開したんです。

角宮 亀戸は、すごかったですよ。

和江 ううん。すごかったですよ。初めは、びつくりしますけど。そんなこといつてる場合じゃないんですよ。ええ、ええ。だから、まだ主人のほうが、怖い目にあつていないんじゃないかなと思うんですよ。

草柳 もう、古いむかしだね。六十年も前のことだ。

和江 それは、いまだに忘れることはできませんよね。

草柳 これから戦争なったら大変だよ。武器が発達しているから。たちまちのうちに崩れちゃうから。だっていつ頃に、潰れたんだからね、東京全体が。和江 爆弾こう落ちますでしょ。その下、逃げるんですから、私たち。

草柳 ぴかっと、たちまち大都会が潰れているんだから。

和江 死つていうのが、あんまり怖いとかなんとかじゃなくて。ただ、あ、逃げなくちゃいけない、爆弾来るわとか、それだけですよね。もうあんまり感じなくなっちゃいますよね。そうなるよね。あとで、考えると、あのときなんかもう…。

草柳 だから、宮城なんてよくやられなかったよなあ。やっぱり避けたんだよな、宮城は。

角宮 靖国神社もやられてないわよね。

草柳 あれやっちゃったたら、アメリカも大変なことになるんじゃないかと思っただろうな。

和江 いろんなところ、立て直してますけれどね。神社とかね。

草柳 三年間、随分苦勞もしたけど、いろんなこと覚えたよなあ。いろんなことあったね、人生ね。四番目くらいにお前の話も出てくつけどね。結婚しないとかいつて、うつへへ(笑)。もう、しかししないね、八十八だもの。もうないな。

和江 戦争はないほうがいいですけど。まだ人生まだ、これで終わっちゃあだめなのよ。

八十八まで生きたのだからあと十年生きて白寿に迫り着かうか「はな」第一四五号(平成22年6月)橋上に立ち空遠く浮かびたる歳晩の月の冴え返る

見つ 「はな」第一四四号(平成22年4月)

——横浜には、どんなご縁があつて来られたのですか。

和江 それはね、横浜には住もうとは思っていませんでした。うち。お友達が、横浜に土地がいてところあるよって、じゃあ、貯金のつもりで土地だけ買っておこうって。ずっと何年も置きっぱなしで。そうしたら、ある日、家の空き地の雑草とか草なんか生えたのを、ご近所の方がお手伝いしてくれて…。それを聞いたらね、悪くつてね。じゃあ建てましょうかっていうわけで。全然ね、予定してなくてね、横浜はね。娘がね、中学入ってからですからね、四十年くらい経つたですね。

草柳 もうね、友達に電話してもね、出てこない。みんな、奥さんばかり相手は(笑)。本人は出てこない。年寄りだからな。岡部みたいにとつか入っちゃったのもいるし。片山は死んじゃうし。電話する相手がなくなっちゃった。

和江 よく、吉野昌夫さんから電話かかってくるんですよ。奥様がね、うちのね、なにかするとすぐ、草柳さん草柳さんっていうんですって。あの方と電話すると、二時間ぐらいいしゃべってる。

草柳 あいつの電話、長いよな。

角宮 「形成」のことなのかな。

草柳 自分の歌のことだね。人のことはあんまりしやべんないね。もうひとりだし、そういう付き合いがないんだろからね。でも、相変わらず歌はうまいよ。歌はうまいよ。片山は死んじゃうし。金子一秋は、喧嘩しちゃったから。

角宮 りっぱな歌集つくつてあげたのにね。

和江 片山さんとね、二人でね。四目くらいずっと通って、一所懸命協力してたんですよ。それを喧嘩したっていうから。なんでえつて。

角宮 金子さんのこと、草柳さん怒っちゃったの。

草柳 なんかなあ。原因はなにか忘れちゃったんだよ。

角宮 威張るつていった。

草柳 ああそうだ。あいつは、威張るんだ。

和江 奥様はいい方なの、すごく。

草柳 奥さんは、死んじゃったよな。あいつ面白いんだよ。目が半分悪いのにさあ。見えないわけじゃないんだけどね。で、泳げないのにさあ。みんな、舟に乗ってたんだよ。舟のまわりにみんな、子供も泳いでいるの。そしたらね、水着みたいになって、あいつ飛び込んで助けたんだよ。舟から立つと思っただよな。立たないから、溺れちゃって、慌ててみんな、飛び込んで助けたんだよ。大森かどつかの、近所の海だけさ(笑)。そういうことあったよ。立つと思っただよな。小さいのもいたから。浮き袋でみんな泳いでいるからなあ。だから泳げなかったら、飛び込まないと思うんだけど。飛び込んだやつたんだよ。なあ、すぐ助けに行つたから、なんでもなかったけれども。あとは岡部だけだな…。まあ、片山だね。打撃だね、死んじゃったのは。ばかだね、あれも。バスのところに椅子があるんだよ。椅子に背中があると思っただよな。後ろに倒れちゃったら、後ろのこんな石があったの。頭ぶつけて死んじゃったの。

角宮 お酒が入ってたつて聞いている。飲んでの帰り。

和江 奥様から何日かあとにお電話いただいて、それでこういうわけで…。朝ね、今日なにが食べたいって、カツ丼かなんだか食べたって、奥様が

ったんですって。そしたら、わかったわかったって。それだけで、もう、行ったらなんのお話もできなくてね。そのままなんですって。それだけなのよって。そんな話しか。まさか、そんなこと思ってもなかったから。そんな話してね、もう、帰ってきてもなにしても全然。顔がなんかもう、内出血か、もう前の片山の顔と違うのよって、いつてたの。

片山に電話せむと思ふなり死んでしまつたことを忘れて 『アンソロジー横浜2009』

片山を偲びてあれば窓近く雷鳴起こる一つなれども 『火の群れ』第一一三号(平成22年4月)

角宮 それだって、お酒飲んでなかったら、違う運命だったわね。きつとね。草柳さんは、お腹切ったけれど、それでお酒止めたから。

草柳 俺、よくすばつと止めたねえ。

角宮 それは、お腹切ったから。覚悟ついたのよ。

草柳 大腸癌。でね、この辺からね、ずつとお臍の下くらいまでね、切るわけ。胸辺りから。それが二回あったんだから。二本ね、電車の線路みたいに、ずつと残つてたの。それがいまね、一本になったの。それが、その一本も消えちゃったよ。ほとんど消えちゃった。筋が、手術痕がね。不思議なもんだね。ま、むかしは太つてたからな(笑)。くつついちゃつたの。痩せて(笑)。

角宮 それだから、お酒止めて、いま長生きして。

草柳 それだから、止めたのかな、そうか。

角宮 そして、後光が射して。

草柳 おかげさまでね。線路が消えて、一本になつて、それも消えちゃつてねえ(笑)。

晩秋の明るきひかり差してゐる表の気配見るとな
く見る 『アンソロジー横浜2009』

和江 どこに、後光あるのかしら。

草柳 なんて、頭いま見たの？

和江 後光が射してるっていつたからね。どこ見ていつたのかしら(笑)。

角宮 横浜歌人会に今度出席してください。後光が射してるんだから。

和江 病院の先生にもいわれるんです。もう、病人の顔じゃないですって、艶がね。いつ死ぬかわからない、つていうとね。

角宮 うじうじつていつてね。

和江 むかしの長男つていうのは、大事大事でしょ。だからね、結婚してから母がね、私に、この人は気が弱くてね、ちよつとお腹痛くても痛い痛いいうから大丈夫ですよつて。肉体的なことに弱いです。

角宮 後光が射す人滅多にいないんだから、横浜歌人会の発展のためにいいと思う。横浜歌人会の守り本尊のような立場でいてくだされば、いいわけよ。

草柳 いやいよ、お地藏様になつちやつた(笑)。

——西へと傾いた日の光にひとつ、ふたつと秋雲の染まる頃、インタビューを終えた。雲の下よりにじむ赤色は、朗らかに喉もとのおかしみを放つような草柳繁一氏の笑い声に似ている。偶然に横浜に住むことになったご縁で、横浜歌人会の求心力となつて支えてくださった草柳氏のお話は、楽しく愉快だ。豪快さと繊細さを兼ね備える。ときに、ふと向けた眼差しに、人のうちを見抜く鋭さが光る。そして、和江夫人のことばは、草柳氏をやらなくつないでゆく。

▽ 2010.11.10 「構成」高橋みずほ

【註】

※1 榊明電舎の創業者重宗芳水氏の志を引き継いだ妻・二代目社長の重宗たけが私財を投じて大正七年に設立した。

※2 「泥」の十年「泥」1 (昭和33年11月)より引用。

インタビューを終えて

大正期に生まれ、昭和の始まりとともに短歌の世界へ魅せられた歌人。岡部桂一郎氏、草柳繁一氏の言葉、生き方は、とりとめもなく騒立ちゆれる時の流れのなかに私たちが惑うとき、向かう先へとそつと導いてくれるように思

う。

横浜歌人會会報第100号記念の特集に、岡部桂一郎、由紀子ご夫妻、草柳繁一、和江ご夫妻にご協力をいただきましたこと、また、まとめるに当たってはご助言をいただきましたことを心から感謝申し上げます。

「M」

横浜歌人会の会報が、昭和 44（1969）年 4 月の結成以来
号を重ね、今回、第 100 号を迎えました。

代表委員・千々和久幸、前代表委員・塩野崎宏、運営委員・
角宮悦子が、それぞれの立場から、横浜歌人会への思い
を記しました。

横浜歌人会会報 100 号を迎えて

横浜の空は高く、青い―エキサイティング集団に

代表委員 千々和久幸

平成 22（2010）年 1 月に横浜歌人会の組織
が刷新されてからちょうど一年、まだ行方も成果も
さだかには見えない段階で何か発言をするのは少
し時期尚早のような気がしている。とは言え会報が
100 号を迎えると聞けば、この節目に何らかのメ
ッセージを残しておくことが先人への礼儀であり、
組織としてのケジメでもあらう。

伝統とはかくのごとく突如起ち上がってくる力で
あり、行方を縛る重圧でもある。今駆け出したばか
りの後継者にとつては、少々鬱陶しいお荷物であり、
得体の知れぬお化けでもある。この重圧とお化けに
どう折り合いをつけるか、それが現執行部に与えら
れた責務であらう。

これを正面から引き取れば、組織目標を達成する
ための絶えざる組織の革新は、集団にとって永遠の
課題だということになる。具体的に言えば作歌活動
と組織運営をどう上手く噛み合わせて、横浜歌人会
を新たな軌道に乗せるかである。

横浜歌人会の目的は言うまでもなく「短歌の創作
及び評論のための研鑽や研究」（横浜歌人会会則第
三条）である。この目的が真摯に着実に実践される
ならば、その過程で友情が生まれ親睦が図られる筈
である。もしも友情や親睦を目的にすれば、その組
織は仲良しグループか、せいぜい気の合った者だけ
の馴れ合い集団で終わる。

目下の横浜歌人会は、長年の間に堆積した滓の一
掃、マンネリズムからの脱却を目指している。横浜
歌人会が体質改善を標榜する限り、その担い手を結

社順送りにしたり、年齢や在籍年数に配慮する暇は
ないのだ。ここ当分は誰かがこの損な役回りを背負
わねばならぬ。

幸い会員の皆さんの御理解と御協力を得て、横浜
歌人会は目覚ましいスタートを切る事が出来た。
新春歌会と観月会歌会は事前に詠草を送付するなど
事務処理を迅速化し、また第二評者を立て突っ込ん
だ批評が可能になった。

研究会は明確なテーマを設定し、共通の問題意識
のもとに参加者が自由に発言出来るようにした。外
部の歌人を交えたパネルディスカッション方式も、
風通しを良くするための新たな試みである。本年度
はさらに寛いだ交流を目指して、4 月には市内の文
学散歩と吟行会が企画されている。

会報も内容・形式ともに刷新された。これまでに
例のない研究会報告やインタビュー記事も掲載され
るようになった。またホームページも開設され、情
報発信に一役買っている。そしてこの一年、新入会
員の申し込みが急増している。会の魅力が徐々に浸
透してきている証拠であらう。

この会が横浜という地縁で結ばれた団体である以
上、ここ当分はその「横浜」にこだわってみたい。
いったい歌人にとつて「横浜」とは何か。固有の文
化（固有の気質、固有の人情、固有の言葉）が短歌
にどんな影を落としているのか、いないのか。そこ
から日本は、世界はどう見えているのか。

横浜の空はどこよりも高く、青い。そして横浜歌
人会の未来は無限の広がりを持って新たに飛翔しよ
うとしている。今こそ横浜歌人会結成当初の誇りと
情熱を取り戻し、この会を世界一エキサイティング
な集団にすることがわれわれの使命だ。引き続き会
員の皆さんの御声援と御協力を御願いたい。

横浜歌人会如是我観 前代表委員 塩野崎 宏

横浜歌人会40年の歴史で、私の知っている限りの範囲で申せば、最も個性的で見事な足跡を残した第一のトップは杉本三木雄さんであり、最も優れた企画者は、青田伸夫さんである。今や横浜に40年近く生活し、横浜市内の住所を、すらすらとそらで言える自分の、歌人としての所属も横浜であることを密かな誇りとしているものにとつて、この二人の優れた歌人の知遇を得たことは、誇りであり、かつ喜びである。

杉本さんの最大の功績は、横浜歌人会の創立者の一人として尽力し、かつ自分自身が初代の代表委員となつて、会の発展に努力したことである。歌人として杉本さんが見込んだ若い歌人を発見すると、何らかの機会を捉えて対象の歌人に接近し、歌人会への参加を、穏やかにしかし十分に理を尽くして逍遙するのであつた。その場合に、人によつてはコーヒールを、また場合によつてはお得意の店に同行して、葡萄酒の伴奏入りでくどくこともあつたらしい。私の場合は、その何れでもなく、どこかの立ち話で、至つて事務的に入会を勧められ、簡単にそれに応じた記憶だけが残る。

それにしても杉本さんの夜の横浜についての知識は該博なものがあつた、杉本さんと共に繰り出した海

岸通や野毛の店々での楽しかった時間を語る同輩の歌人たちの嬉しそうだった多くの顔を、感慨深く思い出すのである。私個人は、そうした楽しい回想が遂に許されなかったが、今から20年前に杉本さんが亡くなったとき、色んなことのめぐり合わせで、告別式のときに弔辞を申し上げる役目を仰せつかったことを覚えていいる。

代表委員は、杉本さんのあと、初の女性として、畑和子さん、その急死を受けて、長老の熊沢正一さんが務められたが、熊沢さんも任期途中で亡くなり、畑さんのときに事務局長となつた清水鉄次郎さんが、会長不在の時期も含めて孤軍奮闘。草柳繁一さんを代表委員に戴くことになったが、病弱となられ、任期途中で塩野崎と交代ということになった。

清水さんは、引き続き事務局長を務めていただくことになったが、最後は病弱が表面化し、20年間という長期間の在任の、とんだ記録を残された。しかし長い間の体験で、歌人会の行事の数々を、実に細かく承知していて、年間企画を製作するときなど、大きな役割を果たしたのであつた。

このことから私の得た教訓は、トップはたとえ不足があつても、事務局長が優れた人であれば、会の運営は旨く行くと言う点であり、横浜歌人会歴代の事務局長の中で、清水さんほどすぐれた人は当分出ないであろうと考えるのである。

さて、今ひとつ、文頭で申し上げた、「最もすぐれた企画者」、青田伸夫さんのことについて書く。

青田さんは、私が役職につくずっと以前から、歌人会の副代表のポストにおられ、その分担の一つとして、横浜と関係のあつた歌人について、関係の深い会員による研究を発表してもらうプロジェクトを

立案し、実行しておられた。このプロジェクトの一環として、私も師匠の山下陸奥について発表させてもらったことがある。陸奥は、横浜学園の高学年生に対する課外授業の一つとして、短歌の歴史の講義をし、かつ短歌の実作をさせるというのを、与謝野晶子の後任として戦中、戦後にかけて受け持っていた。今でも、学園の古い卒業生から、当時の授業の模様を聞かせてもらうことがある。

青田さんのプロジェクトは、大体初夏に行われるのであつたが、前年から種々の候補案を作り、発表者も想定して、年度当初に案を発表し、実行するというもので、私には、青田さんの案の作成時点からの苦心のさまを見るのが楽しみでもあつた。発表のときのすがすがしい空気を感じるときの緊張と喜びも勿論嬉しいものであつたが。

また、青田さんと一緒に行つたプロジェクトに、『横浜歌枕集成』がある。これは最初歌人会の創立25周年を記念するものであつたが、評判が良く、折角なので内容を充実して新版を作り、30周年記念にしようとするものであつた。この何れについても、青田さんはプロジェクトの中心として働き、とくに新版については、本格的なハードカバー、多色刷りのジャケットという、珍しく豪華なものものに結実したのである。会内外の評判もよく、各新聞にも、好意的に取り上げられて、一同青田さんを囲んで、大いに喜んだのであつた。

横浜歌人会は、現在新しい執行部を得て、新しい動きを始めた。

過去に関係したものとして、新しい動きを強く支持するものである。多くの新しい果実を得られることを、願つてやまない。

美しい街

運営委員 角宮 悦子

ことし明けて六日、掃部山公園へ私は足を運びました。桜の頃は、花の色と人のさざめきに明るい掃部山も、ひっそり静まりかえって、冬枯れの丘の井伊掃部頭直弼の銅像に、羽をふくらませて鳩が三羽とまっています。枯れ葉のころがる微かな音をたのしみつつ丘の道をたどってゆくと飯岡幸吉さん（久木）の歌碑が在りました。

まちなかに緑をたもつ掃部山ましてや虫を聴く夜
たのしき 飯岡幸吉

横浜歌人会の前身、横浜歌話会の代表委員をなさっておいですが、飯岡幸吉さんに、私はお会いする機会はありませんでした。この稿を書くに当たって、横浜歌人会と個人的な時の流れをかさね合わせつつ振り返ってみます。

私が入会したときの代表委員は、杉本三木雄さん（創生）でした。東京などで、どなたかの出版記念会でお目にかかる杉本さんは、いかにもお役人タイプの堅そうな感じがして私は少し苦手でした。ところが横浜歌人会に入会してからは、それまでの印象とはまるで違いました。はじめて出席したのが新春歌会で、会場は馬車道の十番館。忘れもしません。会場に入ると杉本三木雄さんは笑顔で迎えてくださいました。緊張している私の気持を解こうと話しかけられ、両手をひろげ、おどけた振りで「横浜は文明

開化の街だよ。受け入れてみんな仲良くなるんだよ」と、おっしゃるのでした。

震災に被災に焼かれしこの都市を離れ得ざりきな
ぜかは知らず 杉本三木雄

「なぜかは知らず」と気持を突き放し表現なさっていますが、ヨコハマがとても好きだからこのような表現になったのでしょうか。日本大通りを一緒に歩いている時、この道は世界の中で美しい道の一つなのだよとヨコハマ自慢の杉本さんでした。ヨコハマという美しい街にくらす幸せを私も感じています。

昭和59（1984）年、私が、四十八歳のとき所属していた結社「詩歌」が、前田透の急逝によって廃刊となりました。立ち上るしかなく私は「はな」を創刊したものの、しばらくは足もとをひんやりした風の吹いている感じでした。心許無い、そうした期間横浜歌人会に友達ができて短歌を語り合えるのは励みになりました。時の流れは、いつのまにか先輩やなつかしい仲間をこの街から遠いところへと連れ去っていました。生前の葛原繁さん（コスモス）の姿が心に残っています。

富士の秀を吹き越ゆる雲冬空の真洞に流れ止むと
きもなし 葛原 繁

葛原さんは横浜歌人会の先心を心配なさって、代表委員を草柳繁一さんが引き受けるよう説得なさっておいででした。横浜駅西口の横浜珈琲館で度度、相談会がもたれて、一隅に私も出席していました。葛原さんもすでにいらつしやらない。見廻せば、あの人々たち、何と多くの人が、いなくなっているのか。あれは、いつの年の新春歌会の夜のことであったか。会場は、やはり馬車道の十番館。総会、新春歌会やがて懇親パーティになる頃、春の雪が降って十番館は幻想的な光景のなかに灯を点しているよう

でした。十番館は、建物全体に、店内の装飾に、古い横浜のにおいがいたします。

額には船の絵、絨毯、階段の踏み心地、トイレも綺麗、ステンドグラスの嵌め込まれた飾り窓。やわらかな照明。まわりの賑わいが、音が消えて私は一瞬、幻影を見たのです。会場の向いのエレベーターが開いて杉本三木雄さんが笑いながら、私たちのいるところへ入ってくるではありませんか。

杉本さんが何となく此処に来ていらつしやるような、馬車道十番館の四階のあたりには異界に通じているのかもしれない。そう感じると次々、人々が思い出されるのです。おしゃれたった水野歌子さん（女人短歌）、愛らしい浦川万寿子さん（花寒）、時々女学校の先生の口調になった荏部雪江さん（個性）、昨年亡くなられた助川信彦さん（あさかげ）、磯幾造さん（表現）もひよっこり頭れるかもしれない。畑和子さん（をだまき）、熊沢正一さん（アララギ）の姿も思い出されます。横浜歌人会を大切にしてこられた多くの人々、姿はなくなされても私たちの心のどこかとながっているはず、です。

新しい風が吹いて、企画が次々と打ち出され、新生の横浜歌人会の観。うしろを振り返りながら新しく。一つの例としてこの文章を書きながら気付いたのですが、代表委員をなさった杉本三木雄さんも葛原繁さんも「泥の会」の会員でいらつしやる。「泥の会」について勉強して知るのもいいのではないのでしょうか。いま、横浜歌人会には、新しい風が吹いてきました。人の集団は、油断をするとすぐ濁ります。

清新な風が、いつも吹いているように、偏らず、みんなの希望や意見をとりあげて、俗な汚れの付かない、横浜歌人会でありますようにと私は願っております。

平成22年度 観月会報告

横浜歌人会恒例の観月会が、十三夜の平成22年10月20日（水）、メルパルク横浜で開催されました。例年なかなかお月様を見ることができないのですが、今年も…。

しかし、歌会も懇親会もたいへん充実したものでなりました。

「概要」

・日時＝平成22年10月20日（水）15時～19時

・会場＝メルパルク横浜（横浜市中区）

・歌会＝15時～16時45分

参加者は40名ほど。副代表委員・平野久美子さんの司会で進めました。

限られた時間でしたが、一首についてふたりの評者を立て、それぞれにできるだけいいねいな批評を心がけました。

・懇親会＝17時～19時

前代表委員・塩野崎宏さんの音頭で乾杯。新入会員のご紹介や会員からのコメントなどを聞きながら、和やかに懇親を深めました。

最後は、いつものように横浜市歌（作詞・森林太郎、作曲・南能衛）を全員で歌い、閉会となりました。

- | | | |
|----|---------------------------------|--------|
| 1 | 見のかぎり鏡のごとき海を航く月の光の満ちみ
ちるなか | 片野 浜子 |
| 2 | 酒なくてなんのこの世という貌ぞマス酒呷る友
はしきりに | 小野 政男 |
| 3 | この夏は良き月影に会はざりき酷暑・相撲の不
祥事引きずり | 塩野崎 宏 |
| 4 | 月満ちて母としならむ日を待てるをみなしづか
に朝を歩めり | 小林 勝 |
| 5 | 烟隅の南瓜の花の黄の色をのぼる満月に思ひ出
したり | 塚田 キヌエ |
| 6 | ひさかたの空にかかれりんりんと残暑難ぐご
と照れる月代 | 日野原 典子 |
| 7 | 行き会ひの夜空の雲はかすかなる虹伴ひて移り
つつあり | 渡辺 謙 |
| 8 | 向日葵の茎朝顔の蔓そして月を横切りゆく蟻の
足 | 吉野 裕之 |
| 9 | 十ばかり月がこの世にあつたならさぞかし夜は
騒がしきかな | 間 ルリ |
| 10 | 穂薄のなびく一画整地はじまり銀の穂波は一日
で消ゆ | 野崎 美智子 |
| 11 | なぎわたる海面に一筋光さし月光菩薩現れまさ
む | 高橋 庚子 |
| 12 | 母の遣せる関東大震災記その夜月のみまどかに
照ると | 関口 満津子 |
| 13 | 雨過ぎて五日の月を吊したりまばたき忘れし青
き夕空 | 河北 笑子 |
| 14 | 月琴がどこもしれぬところから聴こえて今夜
はたしか十六夜 | 角宮 悦子 |
| 15 | 「空襲」の警報つづきひもじきに月も卵の黄身
に見えしよ | 朝井 恭子 |
| 16 | 御用邸遙かに望む宿の庭月の雫を無心に浴びる
(那須) | 平井 郁子 |

「黄木会」のこと

熊沢正一

古い歴史をもつ横浜歌話会が活動を休止したま
まとなつていて、横浜に実質的な歌人の集まりが
ないところから、これに代わる作歌上の勉強を中
心とした会を作ろうとする動きが前からあつた
が、勉強中心の建前として会員数は大体三十名以
内、年齢は三、四十代として考えることとし、杉
本三木雄（創生）、福田二三男（国民文学）、藤曲
豊（樹木）、宮田信次（花実）、吉田宗一郎（同）
及び私（アララギ）が発起人となつて呼びかけ
を行なつた。この結果に基づく懇談会を花実会員
の岩崎一平氏（初代相撲協会診療所長）宅で昭和
三十一年十二月五日に開き、参会者全員の賛成を
得た。次いで翌三十二年一月六日、会則等の審議
を中心とした懇談会を前記岩崎一平氏宅において
開催した。この日の参会者は前記六名のほか雨宮
熊太郎（アララギ）、金子一秋（コスモス）、川上
貴美子（花実）、相馬信子（遠つびと）、高見房一
（アララギ）、中島大（歌と観照）等であつた（略）。

第一回の研究会は同年二月二日県職員会館で開
き十四名が参加し、雨宮熊太郎氏が記念写真を撮
つてくれた。以後、杉本三木雄氏のあつ旋により
会場は主として県の職員会館、及び議員会館、後
半に至つて野村良政氏のあつ旋による市の職員寮
を中心として毎月開催した。（略）（註・昭和38年以降中断）

今回、横浜歌人会の発足に当たり、この黄木会
はその先駆的役割をなしたともいえないことはな
いし、黄木会において会員相互が築いた信頼感は、
その殆どが横浜歌人会に参加している事実から、
必ず本会にも役立つことと信じてやまない。

※「横浜歌人会々報」No.1より

17	静かの海渡り来たれるもののやう守宮は星の手をひらきたり	大沢 優子	33	月の夜はドビュッシーなど聴きたくて翻車魚ゆらり海面をめざす	神谷 由希
18	火を入れし織部灯籠月光の淡さと庭の夜をわけあふ	永平 緑	34	締切りに間のある歌稿ぶらさげてポストまで行く月を見ながら	千々和 久幸
19	酔いまわる頃夜の屋根上に織月のいたく似合える猫見ついたり	長野 義和	35	四十五億歳の月が縮みてゐるといふ	わが身ひとつの秋にはあらねど
20	柿の実がどずんと落ちる谷戸径の静けさのなかケータイの鳴る	井澤 幸恵	36	月明かりに夜の磯しろく泡立ちて草ぶくの産卵既に始まる	角田 三笛
21	まんまるの月に送られジャズを聴く細き階段上りしところ	原 昌子	37	十三夜 皇后さまのバースデー月光清く澄わたるらん	石田 幸子
22	穂すすきと白き桔梗びんに挿し三五夜の月の出で来るを待つ	土屋 美代子	38	こうこうと公園照らす月出でて祭櫓は明日待つばかり	小寺 敦子
23	月光の今宵はみちて誰も来ぬ誰をも待たぬ時流れゆく	森 藍火	39	月明り雲にすこしあり花薄と警報なくて酌む祖父の合一(警報く空襲警報)	清水 鉄次郎
24	月影という和紙に月あるようなほの白き明かりかな	高橋 みずほ	40	胎の児は女の子らしいと告げきたりうす雲まとふ八日の月は	山本 登志枝
25	帰り来し部屋に射し入る月光は銀の箔置く湖作りをり	中川 暁子	41	月の出を見んと寄るまど薫いろの十五夜すでに中空にあり	松井 芳子
26	月光がガラスの馬をこはすおと凍てたる夜に一瞬さきぬ	小島 熱子	42	飛行機雲白く引きつつ進む先今宵十五夜の昼の月浮く	田谷 幸子
27	車窓より眺めた満月やや赤くまだ低くければピル蔭に消ゆ	佐々 木千枝子	43	わが眠る夜更けの窓に立ち尽す月光の量測り難かり	平野 久美子
28	咳すれば胸板痛し仰ぎ見れば十六夜の月東天にあり	人見 忠	44	本牧の岡の老松こそげ取るチェーンソーの音月とさしぐむ	鳴海 有
29	ひとときは議論激せる会果てて肩並べ見る十三夜月	相澤 一男	45	秋まなか夜の車窓に額をつけほの白き月の力見ており	中川 佐和子
30	木の間より十六夜の月赤く見ゆわが誕生日の気付かれぬまま	荒川 とよ子	46	暮れてなほ地上は暑しまどかなる月がだまつて見下してゐる	早島 和子
31	ならばゆく「かぐや」に紛れ月星へ仲秋にみる野うさぎの夢	内山 汀子	47	鬼ごっこはしやぎいたりし幼児の去りて展くる夕照の丘	木村 千鶴子
32	まはだかの月にしのびてサンタンカ咲くほとりすぎチロリアンランプまで	伊藤 宏見	48	月白しハマのメリーを想ひつつイセザキ通り歩いてゐます	田代 弥生

◇新会員の紹介

- ・後藤 恵市(日本歌人)
推薦者〓千々和久幸、中川佐和子
- ・半澤 敏子(槻の木)
推薦者〓相澤一男、葉山昌子
- ・工藤こずゑ(笛)
推薦者〓山本登志枝、千々和久幸
- ・三枝むつみ(水甕)
推薦者〓山本登志枝、千々和久幸
- ・野一色容子(50番地・開放区)
推薦者〓山本登志枝、千々和久幸
- ・日向 輝子(綱手)
推薦者〓千々和久幸、井澤幸恵

◇ご逝去

- ・笹川 若子様 平成22年8月
- ・助川 信彦様 平成22年10月
- ・磯 幾造様 平成22年11月

横浜歌人会会報 第100号

発行日 二〇一一年二月二十日
編集人 長野 義和
発行人 千々和久幸
発行所 横浜歌人会

URL <http://yokohama-kk.web.infoseek.co.jp/>

振替口座 00200-5-77630

制作 アトリエ云 / 印刷 野崎印刷紙器株式会社

このファイルはホームページ配布版のため、奥付の内容が印刷版のものとは異なります。